明治廿六年十二月廿四日發行

女鑑

第五十三號

東京國光社

女鑑第五十三號目次

女鑑

母の第一に心すべきもの

論說

仁愛と義理……大林弘一郎

女子要言第二篇(廿五)……三輪田眞佐子

史談

富田信高の妻……松野操雄

節婦きせ女……古里をの子

家政

折形(五)……有住齊

家政雜事(八)……

漫錄

沖繩縣旅行日記　隨々庵主人●三卿三說　松野操雄●道の柴

折歌合　久志本常幸●庭つくり　松平樂翁公●信捧柔和糎

故小山田與淸

女鑑師(其五)……乙羽庵主人

文林

歌　近衛忠熈●東久世通禧●鍋島直大●前田利嗣●黒田清綱●長岡護美●前田利鬯●津守國美●諏訪忠元●黒川眞頼●小出粲●植松有經●三浦千春●佐々豊水●萩野隆道●野崎宗英●鍋島榮子●柳原愛子●小池道子●松平健子●鳥尾廣子●鶴久子●中島歌子●三輪田眞佐子●諏訪晴子●尾崎すう子●海上壽子●師岡須賀子●片岡光子●西ゆた子●松浦辰男●千稻子

文　歳の暮　尾崎すう子

●雪のふりけるあした竹を見て　竹園

雜報

●昨日●野村望東尼の話●土居すみの貞操●知らせ

教の庭

歌文數十首

餘芳

みちのつと(承前)……小池道子

口畫……高橋松亭

挿畫……小峯苔石

富田信高妻



女鑑

母の第一に心すべきもの

母たるもの、已に、其の兒を擧ぐれば、之を訓へ養ふべき責あり。而して、之を訓へ養ふに於いて、其の、第一に心すべきものは、蓋、其の兒をして、虚飾の念を長ぜしめざることとならん。

何をか、虚飾といふ。徒装假飾、却りて、天眞に背き、本性に反するものをいふ。それ、人には、自、其の天性あり。天性は、決して、變換を望むべきものにあらずして、人智を以て、いさゝか、之を修良することを得るに過ぎざるものなり。幼きものゝ側に居る人は、深く、其の天性と、其の嗜好とを察し、また、

經驗によりて、如何なる傾向あるかを考ふべし。而して、其の天性の如何を認めなば、如何にして、之を修良し得べきか。何の業、何の技が、最、之に適ふべきか。はた、如何なる缺點あるか。如何にして、この缺點を補ふべきか。之を實行して、果して、成効を見ることを得べきか。否かをも究めざるべからざるなり。かくして、天賦の性質を修良し、發達せしめ、以て、其の、不道德、頑僻、過失等に陷るを防ぐべく、また、其の躰軀の健全をも保ち得しむべきなり。然れども、これ、天性を修良せよといふに止まり、他人の性質に摸擬し、他人の性質を假裝せしめよといふにはあらざるなり。

然るに、世の父母たるもの、往々、其の兒の天性如何を察せずして、漫に、他人の性質を摸倣せしめ、假裝せしめて、以て喜ぶものあり。これ、其の兒に、虚飾

の念を長ぜしむるものにして、吾人の、最憂ふるところなり。
ジョン、ロックは云へり。虚飾は、他の過失の如く、兒童の時に胚胎するものにあらずして、天性敎なきもの丶なし得べきところにあらず。假令は、虚飾は、荒地に生ふる雜草の如きものにあらずして、未熟なる園丁の、花園に手入したるが如きものなり。管理と、敎育とによらずは、虚飾を爲す能はずと。實に、虚飾の念は、兒童の、自發するものにあらずして、母たるもの丶、其の天性を察せずして、漫に、之を責むるに、其のよくせざるところを以てするより生ずるものなり。即、虚飾は、母の管理、および、敎育より生ずるものなり。虚飾の責は、一に、母に在りといふも可なり。
今、粗樸淡泊なる兒童の、人の歡心を買はんと欲して、優美なる態度をなすが如

きは、大に、可憐のさまあるが如くにして、却りて、笑を招くに過ぎざるものは、必竟、其の天眞にあらざればなり。人は、眞實を愛するものにして、決して、虚飾を愛するものにあらず。故に、粗野なる性質の人は、其の自然に任せ、漫に、彫琢せざるも、却りて、摸倣百出、醜を現すよりは、遙に勝れり。故に、母たるものは、決して、其の兒の天性に逆ふことなく、たゞ、天性を標準として、之を修良すべし。然らずば、一生、虚飾の人となり、心にもなきことを、外に現さんと欲し、或は、また、固有の性を、外に現さんとして、常に、他人の態度、言語に摸倣し、爲に、人の不信用を招く結果を見るが如き不幸に陥るべし。世の母たるもの、深く心せずてやは。

論說

仁愛と義理

大林弘一郎

天地の間、生あるものは、皆、相憐み、相愛するの情なきにしもあらねど、人はかり、相親み、相愛するの性情あるものはあらじ。これを以て、萬物に秀でゝ最高の地位を占むるなり。されど、この愛情の、能く、其の程を得て、彼我、公私、内外、親疎、皆、各、其の區別も判然として、相亂れざるを致すものは、義理の制裁あるによるなり。故に、仁愛の心、盛なりとも、義理の道に暗きときは、其の仁慈親愛の情も、皆、其の正理に違ふ。故に、終には、非義非理の私愛私情となり、人の性情の正しきを失ふべし。古人の言に、仁は、人の安宅なり、義は、

人の正路なりと云へり。是ぞ、誠に、人の遵守すべき金言なり。すべて、人の、相愛するものは、皆、仁慈の心なれは、人の、相和樂好合する所以のものは、この仁慈の心情の連絡して和合するより外なるなし。去れども、其の程度制限なきときは、千萬人、皆、同一に泛親し、博愛せさるべからざるに至るべし。これ、人の、固より堪ゆべき所に非ざれども、もし、かくの如く、博愛ならされは不可なりとせば、必、其の情義は、隨ひて薄くなりて、却りて、薄愛となるべし。又、其の情のみに任せて、私愛を施して、公道義理を顧みざるときは、其の愛情の厚きを加ふるに隨ひ、益々、正理に悖りて、非義に陷るべし。されは、仁愛を施すも、情義を厚くするも、皆、義理の正しきを得るに非されは、人の天性の至情を、正しきに道びくこと能はざるなり。故に、仁愛は、義理によりて全く、義理は、仁愛

によりて全く、兩者、必、相待つて、人道、始めて全し。仁は、人の安宅、義は、人の正路とは、蓋、これを謂ふなり。

人の愛情には、種々の別あれども、其の大要は、左に述ぶるが如し。曰く、父子の愛情、曰く、君臣の愛情、曰く、夫婦の愛情、曰く、兄弟の愛情、曰く、朋友の愛情、是なり。其他は、皆、類に從ふて推し測るべき也。一に、父子の愛情なるものは、人生、第一の重大なるものなれは、必、其の正しきに從がはざるべからず。即、父母は、其の子女の、生育發達して、必、完全なる人たらんことを希ひ、之れが爲に、種々の方法を盡し、之れを教養するは、皆、其の親愛の情に非ざるなし。然れ共、若、或は、此の情の過ぐることあるときは、必、其の子女を害ふに至る。譬へは、其の子女の、行爲の不可なることあるも、之れを愛憐するの餘、之

れを宥恕して、之れに教ふるに道理を以てせざるときは、其の、成長するに至りて、猶、其の非を覺らず、遂には、終身の大過失となることあり。これ、其の愛情、正理に違へるが故なり。又、其の子女の、父母に奉事するにも、愛敬の至情を盡して、其の親を全うするは、正理なり。其の父母、過失あるも、之れを諫め救ふことなくして、たゞ、之れを保護するが如きは、是れ、其の父母を惡に陷るゝものなれば、即、非義の愛なり。故に、父に爭子あれば、則、身、不義に陷らずと云へることあり。父の命に從ふて、其の不義を爭はざるものは、奚んぞ、孝子とすることを得んやと云ふなり。

（以下次回）

女子要言　第二篇　（廿五）

三輪田眞佐子

第三　高尚なる生活。　高尚なる生活とは、卑俗の生活に相對して云ふものなり。此の二者の分かるゝ處は、上下の身分に由らず、亦、貧富の懸隔に由るにあらずして、富、且、位ある人と雖、其の生活の趣味、野なるものは、卑俗なる生活をなすものとし、貧、且、爵なきものと雖、其の生活の趣味、潔なるものは、高尚の生活をなす人といふべきなり。凡、一家には、各、家風あり。而して、其の家風は、生活の趣味と相伴ふものにして、長幼、序なく、朝夕、禮なく、若、暇あれば、三味線を以て、不德の端唄を歌ひ、或は、花合を戯はし、又、時としては、爲永流の人情本を讀み、春日は、家族、各、優美の心なきに、異樣の装をなして、觀花に出で、冬日は、男女相混じ、火燵に集りて、笑聲、門外に聞こゆる如き家風は、乃、

卑俗なる生活をなすものなり。有徳の女子、果して、斯る家風を擇ばんと欲する乎。

之れと、霄壤の差あるものは、高尚なる生活なるかな。凡、家族擧て、自個の分限を知り、天職を全うせんと勉め、官吏たらは、責任を盡くし、百姓たらは、天工を利用し、恒に、仁義道德に從ひ、父子、親あり、夫婦、別あり、閑暇を消すには、有情の歌を詠じ、或は、琴、以て、君が代の曲を彈じ、小兒も、能く、禮義を知り、婢僕も、能く、作法を辨へ、若、富むものならは、慈善杯の公益を勉め、而かも、自、節儉を守り、若、貧しくとも、所謂、渇して盜泉の水を飮まざる類の生活は、高尚なりと云ふべし。識見低き女子、稍もすれば、卑俗なる生活に安んぜんとす、戒めざるべけんや。

第四　質實なる生活。　富を以て、誇らんとし、智を以て、慢らんとする如く、人の通弊は、虚飾にある歟。殊に、都會の人情を見よ、家財、富豐ならさるも、門戸を廣大にし、衣類を華美にし、世を見ること輕薄にして、一片の恃もしき愛情なく、其の俗習、後天となり、兄弟の離散を哀と思はず、親子の不遇を憂しと感せず、人の生死を小事と見做す等、總て、味なくして、冷かなり。あはれ、生活の趣味を主とする女子にして、此の風を矯めずんは、人事、已みなん。

是れを以て、吾は、質實なる生活を賞揚して止まさるなり。抑〻此の流の生活は、古今に徴し、實地に行ふて、一點の非難なきものなり。試みに思へ、衣襟、數ふべからずと雖、殊さらに侈らず、資産、饒かなりと雖、徒に費さず、質朴を以て、經となし、儉約を以て緯となし、而も、吝嗇に流れず、隣保、禮を以て交り、家族和合

し、亦、能く、祖先を尊び、子孫を戒め、一切の外形、深く納めて虚しきが如くし、其の内部は、混々として、福運の絶えざるものは、質實なる生活をなす家に於いてのみ見るを得べし。明の楊氏なる女子は、其の家、甚富むと雖、未、一錢の金、一尺の帛も、徒に費さず、唯、姑に、能く事ふるのみを、無上の樂となしゝが、時、偶、亂に逢ひ、人々、定業を棄て、奢侈を極めたるを以て、其の後、糊口に窮せざるものなきに至るも、彼は、超然として、世濁に染まず、終身、儉素の志を改めざりければ、恰も、常盤木の、四季、恒に、蒼々として殷なる如く、毫も、乏しきを知らで、其の兒女等は、汲々として、心を學事に委ね、各、立身し、家運、長へに榮えたりしとかや。古人曰はく、驕る者、久しきを保たずと。楊氏は、驕らざるを以て、久しかりし歟。兎に角、質實なる生活の餘慶にありたりけん。

第五　安心なる生活。

苟も、鬼神にあらざれば、天變地異、測るべからざるのみならず、人間の榮枯盛衰も、亦知ること難し。見よ、女子、幼きときは、父母の恩惠を、無比の恃みとするも、無常の風は、早晩、父母を誘ひ去り、世路渺々、唯、我、獨在りと歎聲を發するに至ることもあらん。既に嫁すれば、良人の愛、深かるべしと望むも、彼れ、姿に迷ひ、酒に耽るなどより、苦慮絶えず、赤貧、洗ふ如き身となることもあるべし。遂に、柱石と恃みし子等も、或は惰り、或は病みて、其の身の安樂は愚か、反りて、煩累となるばかりより、あはれ、世は、夢か、將た、空かと疑はるゝ程の境遇に陷ることもあらん。古人は歌ふたりき、「世の中をおもひつゞけて見るときは散るこそ花の盛りなりけれ」と。蓋し人生の榮華、亦、花に似たり。然れども、此れがため、落膽せば、其の、未凋衰せさる時、已に、前途

を慮るは、人生に希望を與へ、且、興味を添ふる所以ならん。思ふに、吾は、屢、人生の艱難を述べしと雖、固、讀者をして、厭世的の理想家たらしめて、遁世無爲の境界に導かんとするにあらず、寧、憂を、未發の時に察し、禍を轉じて福となす樂天的の世帶家となり、怡々として、人事を果せよかしと祈るにあり。勿論、此等の次第は、いまだ、春秋に富まざる孃等には、感ずること少からん。されど、學びの窓にある頃より、疾く、浮世の事情を悟らでは、老いぬる後、臍を噬むとも及ぶまじ。

然らば、如何に、此の世を渡らば、大いなる過なくして安心なる乎。曰く、人事を盡し、天命に率ふにあり。乃、幼より、學を修めて、能く、人道を辨へ、恒に、節儉と勉勵とを以て、身を攝し、霜を踏みて堅氷至る理より、未來の情勢を、現在に洞察

し、事變ある秋にも周章狼狽せざらんことを謀り、若、思ひを焦し、身を勞するも、尙、不幸に逢はゞ、時なり、命なりと考へ、恒に、心、廣く、體、胖かなるを以て、安心の道となす。故に、女德を修めて、俯仰、天地に恥ぢず、女事に明かにして、家政の整理に巧みなる女子は、良人に棄てられ、舅姑に忌まる等の恐なく、終生、大いなる苦痛を感ぜざるべし。彼の、良人、世にあるの時、錦綺甘肉、尙、心に滿たざる婦人も、一朝、寡婦とならは、忽、兒は、寒に泣き、身は、餓に悲むに至るものあるは、必竟、人事を盡さゞるに基くなきを得んや。諸孃、心して、彼等の轍を踏む勿れ。

因に言ふ、此の安心と、懶惰と、相混同すべからず。抑、女子、或は、財産の力を假り、或は、門地の勢に誇り、懶惰に生活するを以て、安心と信じ、或は、未、少も、人

生の義務を果さずして、年若き頃より隱居するを以て、安心と思ふ誤に陥り易し。然れども、是れ、社會の癈人たらんことを願ふに外ならずして、眞の安心と、似て非なるものなり。元來、女子は、家にありては、父母を柱と恃み、既に嫁しては、良人を、天と戴き、年老いては、子を、杖と便るは、得策なりと雖、其の依頼心增長すれば、勢、懶惰心と化するならん、而して、其の極は、女子の本分を全くすること能はずして、唯、男子より、玩弄物視せられ、施いて、男尊女卑の源をなすものなり。故に、女子は、其の心、其の才、自存するに足る能力を有し、而して後、自然に從ふて、男子に和するを良とす。

以上に列記したりし生活の品類は、最普通にして、之を標準とするも誤らざるものなり。吾は、脫塵的生活の如きは、一般女子に勸むるを欲せず。何となれば、

虎を畫きて、狗に類し、鵠を刻みて、鶩に類するは、世の、倣ひて、而して、達せざるもの、、將に戒むべきことゝあればなり。若、女子、學りて、「千代能がいたゞく桶の底ぬけて水たまらねば月もやどらず」と歌ひて、因緣和合の次第を悟りたる千代能尼子となり、「萌出づるも枯るゝもおなじ野邊の草いづれか秋に逢はで果つべき」と、嵯峨野に立ちて、盛者必衰の道理を辨へたる祇王となり、「麻糸のよれつもつれつむつかしや有無の二を早く離れん」と感じて、安心立命の方法を知りたる蜆川の妻となるならば、特得非凡の生活をなすも可ならん。然れども、十中八九の女子は、脫塵的の生活をなさんと欲せば、忽、憂愁的の女子になるにあらざれば、遊逸的の女子となり、世事を厭ひて、最早、右顧して、老親を慰め、左視して、兒童を導き、朝には、家族に先ちて起き、夕には、婢僕に後れて寢ね、錯雜

なる家政を主ること能はざらん。要するに、女子は、飽くまで、社交的の人として、能く、世務に任じて、然も、高尚の區域を離れず、雅俗を兼通して、一點の僻なき生活をなすを願はゞ、必、悔なかるべし。

史談

富田信高の妻

松野操雄

わが國は、いにしへより、武きことを尚ぶ國柄なり。されど、國人、おしなべて、健くをゝしくて、君をおもひ奉り、國を愛ふこゝろ、まことに深し。かくて、この心は、獨、男のみもてるにはあらで、女といへども、また然りしなり。かゝれど、もし、事ありて、天皇、みづから、軍をひきゐて出でたゝせ給ふことあれば、皇后も、また從ひ行き給ひき。また、皇后をして、軍をひきゐて出でたゝしめ給ひ

しこともありき。將軍も、多くは、その妻をゐて行きけり。されども、いさゝかも、軍のことをあやまらざるのみならず、なか／＼に、夫をたすけて、偉なる功績を立てためしもありき。げに畏かれども、神功皇后は、親、兵士をひきゐて、遠き海のあなたなる新羅にさへ押し渡らして、三の韓どもを、悉まつろはしめ給ひ、政所を、任那に建てゝ、凱旋ましく／＼き。また、これより後、舒明天皇の御時、上毛野形名が妻は、よく、夫をたすけて、遂に、賊を討ち滅ばさしめたり。下りて、木曾義仲が愛妾巴御前、城資盛が姑板額が、婦女の身にてありながら、大に、勇き力のありしことは、世の人の、よく知るところなり。いよゝ下りて、戰國の頃には、婦女にして、勇き名のありしもの、あげて數へがたき程なりき。

こゝに、豐臣氏の末つ方、天下の諸侯、二にわかれて、關ヶ原に戰ふことありき。この時、安藝宰相秀元をはじめとして、大勢の軍人、伊勢國安濃津の城を攻めけり。城主富田信濃守信高、加勢として來れる外部左京政壽とともに、城の外へ討ちて出で、こゝを先途と防ぎ戰へり。されども、敵は、目にあまる大勢のことなれば、味方のものども、多く討たれ、信高も、已に危く見えけり。

か丶る所に、城の中より、容貌、ことの外、美しき若武者、緋威の具足の、中二段は、黒皮にて威したるを着、半月の立物打ちたる冑を被りて、片鎌の鎗を取りて進み出で、まづ、敵のつはもの、中川清兵衛といふを突き殪し、なほ、その外、五六人のものどもに、手疵を負はせ、あたりの敵を、四方に追ひ散らしたり。これを見るもの、敵も、味方も、ひとしく驚きぬ。信高は、定めて、政壽が扈從のものならんと思へば、彼の者は、政壽の少年に候ふかと問はせければ、いな、さにあらず。そのもの丶内冑を見れど、年の頃は、二十四五ばかりにて、眉を拔き、假粧し、鐵漿くろ〳〵とつけ、臙脂さへさしたれば、必定、女なるべしと云ふ。信高、あまりの不審さに、立ち寄りて、内冑を見入れたりけるに、彼の若武者、馳せ寄りて、わが君、未討たれさせ給はで存命へ給へるかといふを見れど、わが妻なりけり。いかなれば、か丶る有樣したるかと尋ぬれど、妾は、君の討たれさせ給ふと聞きしからに、同じ所にて、枕をならべて討死せんと、かくは出で立ちしなり。されど、此の世にて、御目にか丶る事のうれしさよといひて、涙を流しければ、信高も、膽を消して、かつは驚き、かつは喜びて、まづ〳〵、此方へ入り候へと、誘ひて、本丸に歸り、い

たく、そのいさをしを賞めけり。程なく、仲裁するものありて、この度の戦は、和睦となりぬ。此の妻は、宇喜田安心が女にて、かくれなき美人なりきとぞ。

あはれ、信高が妻、夫の危急を、餘所に見で、女ながらも討ちて出で、敵をたふし、はた、追ひ散らしたるのみならず、同じ所にて、枕をならべて討死せん。といひたる、まことに、勇にして貞なりといふべし。今や、聖明の御代に生まれ、信高が妻の行爲は、いさゝかもやうなけれど、世の母たる人、かれの心を心として、一旦、緩急あれば、義勇、公に奉じ、以て、天壤無窮の皇運を扶翼し奉る忠愛の國民を養ひ成したまへかし。

節婦きせ女

古里をの子

近頃、節婦きせ女の、めでたき話を得たれば、また、貴社に贈りつ。

豊後國の笠和町に、きせといふ女あり。父は、二三歲の頃、母は、十歲ばかりの頃、みまかりしかば、異父兄、ながにし、引きとりて養ひけり。やうやうおひ立ちて、同じ町なる、彥助といふ者のかたに、婢にてつかはれけり。月日かさなりて、十九のとし

に、房吉といふ者と夫婦になれり。その後、夫房吉、癩病にて、起臥もなりがたくなれるを、女の手業にて、夫と、齢老いたる姑とを養ひ、さらでだに貧しき中を、朝ゆふの飲食に心を用ゐ、衾枕に至るまで、むさくろしからず調へ、時々、夫と、姑との衣類を洗濯し、おのれは、垢つけるまゝの襤褸をまとひて、夜の更くるまで、紡績の業をなし、夜のものをも身に着ずで、そのまゝ、姑と、夫との側にうちふし、夜の明けはてぬほどより起出で、やがて、晝の業にとりかゝる、その堪へがたき勞を、夫房吉も、見兼て、いとをしくおもひ、汝、かく節義を守り、かひ〴〵しく介抱しくるゝはうれしけれど、わが病、とても愈ゆべき病にあらず、しかるを、年わかき汝が、いつまでも、われに付き添ひ居たりとて、末たのもしき事あるべしともおもはれねど、離緣すべしと云ひ聞かせつれど、きせ、更にうけひかず、夫の、かくいふは、わがしわざの、病を厭ふさまに見ゆるにやあらんと、これより、いや增し、心を盡くして、をり〳〵、人に雇はれゆく時は、姑と夫との晝食のこしらへを調へおき、雇へる家にまかりては、憩ふべき時にもいこはず、課せられし事を、手早くしをへて、暮ぬうちに家に歸り、すぐに、看病にとりかゝれり。その平常の艱苦を見て、

氣強かりし姑も、角をそらして、まことの娘の如く、いつくしみしほどに、夫も、病の中ながら、母と妻との間のむつましきに慰みて、快く、月日をおくりけり。然るに、房吉、病、日にそへて重くなり、起臥も自由ならねバ、一間にのみ引き籠り居るを、夫の氣鬱をおもひはかりて、手業の隙には、脊負ひもて、家の垣内をいく度もめぐりありき、或は、園中の草木をみせ、或は、茶菓などを求めおきて、これをすゝめ、また、寒氣烈しく、手足の冷え凍ゆる時は、おのれが肌にさしいれさせて溫め、面腫れ、鼻塞がり苦しむ時は、臭氣の甚しきをも知らぬさまして、鼻汁を吸出す、恰、小兒の乳を吸ふが如く、いかにも甘味のあるにかとおもふばかりに、厭はしき氣色を、さらに見せず、その深切なる、至らざる所なかりき。さばかり、心を盡くして、ひる夜いとまなき中にも、夫の病、とても愈ゆべきにあらぬを量り知りて、その期に臨み、狼狽へて、身隱しの用意もえせざらんは、恥、これより大いなるはなしと、女心にも、いさゝか、金錢を貯へおきて、つひに、夫の死せりし時、そをもて、葬儀をも、ねんごろに營みけり。また、はやく、本生の父、死せしのち、十歲ばかりまで、修驗者正德院が養育をうけたりき。然るに、その後、正德院、年老い、

身貧しくなりて、せんかたなさに、また、きせを、ふたゝび來にけるに、きせ、幼年の時の恩義をわすれず、正徳院を、別宅におきて、夫と姑との外に、これを合せて、三人の奉養を、おのが手ひとつを以て、怠らず仕へけるは、男子もおよばぬわざなりけり。かくて、夫の病、十三年の久しきを經て死せりしに、その後、姑と正徳院とに、また、十五年の間、孝養を盡くして、つひに、母もなくなりしかど、今は、ひとり身となりたるを、正徳院ゆゑに、なほくるしまんは無益なり、こなたに歸りて、心のまゝに暮すべしと、兄弟のものどもより、ねもごろに云ひおくりつれども、たとへ、わが身は、いかになりても、正徳院の、老いてさまよふを見捨てがたし、また、本生の家にかへりては、夫、姑の追福もおもふまゝになりがたしとて、後には、正徳院がもとにうつりて、よそめには、誠のおやにやとおもふばかりに、孝養を盡くしけり。そも／＼、きせ、三十二歳にて、寡となりしより、終身、魚肉を喰はず、貞節を守りて、日々、墓參し、家にしては、本生父母、夫、姑などの位牌に仕ふること、生けるにつかふるが如く。夏の夜は、位牌を、蚊帳のうちにいれ、團扇もてあふぎ、冬の夜は、位牌を懷にいれて暖かなるやうにし、在世のときにかはらず仕へあ

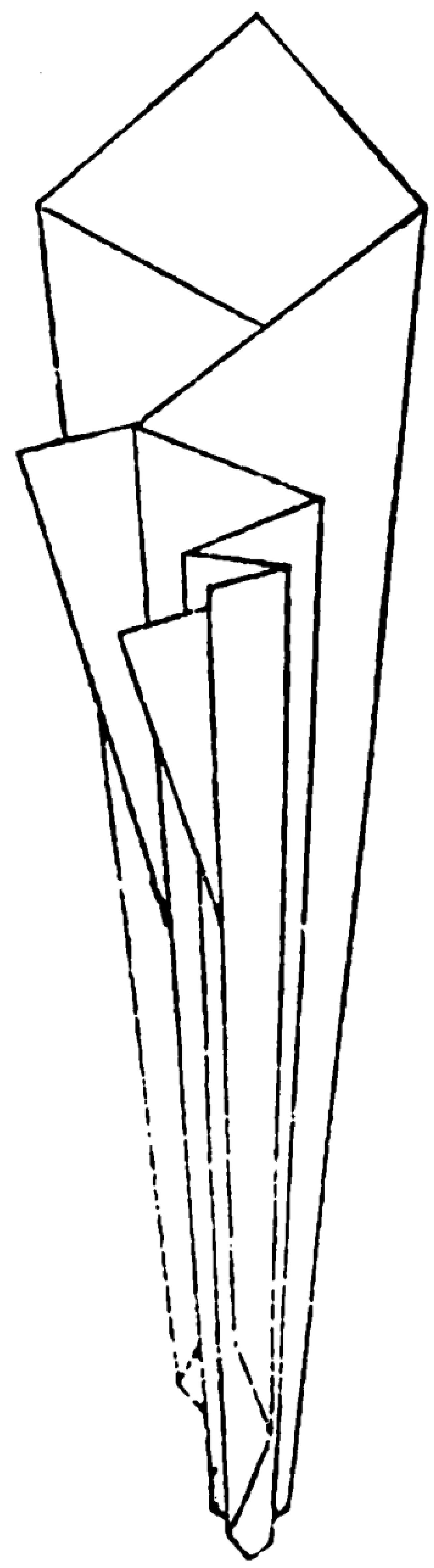
つかふを、心なきものは、此の女は、狂氣したるにやあらんといへりしとぞ。はじめ、房吉がつまとなりし時、田町の和泉といふ者、かりの親になりて、婚儀をとゝのへしめけり。その和泉、死したりしにも、厚く、とぶらひのわざをなし、毎月の忌日には、香花を携へて、和泉が家に至り、靈前へ仕へけり。夫の死せるほどは、まだ若かゝりしかば、外よりも、たび／＼、再縁をすゝめけれども、堅くいなみて、強ふる者あるときは、物をもいはず落涙し、たゞ、うちふしてあるほどに、おのづから、操を盡くす眞實顯れて、勸めし者も恥たりしとぞ。かく、夫、姑、繼父の三人に、生前の孝養、死後の追福、それのみならず、假親にさへ、節義を盡くせる行狀、もとの府内の知事も、いたく感じて、金穀、たび／＼與へられ、文政七年より始めて、賞賜七度に及びしとぞ。

家政

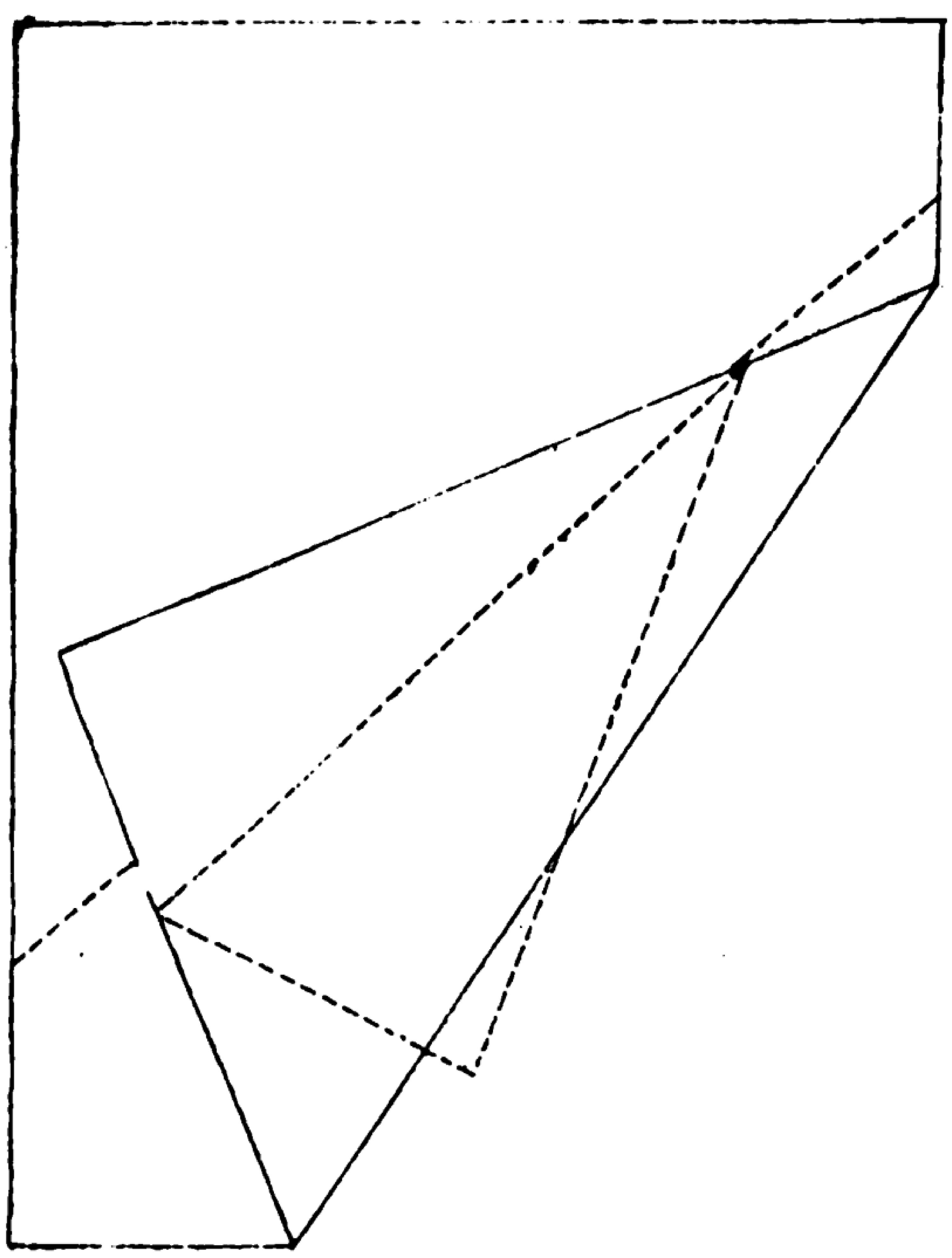
折形（五）

有住齊

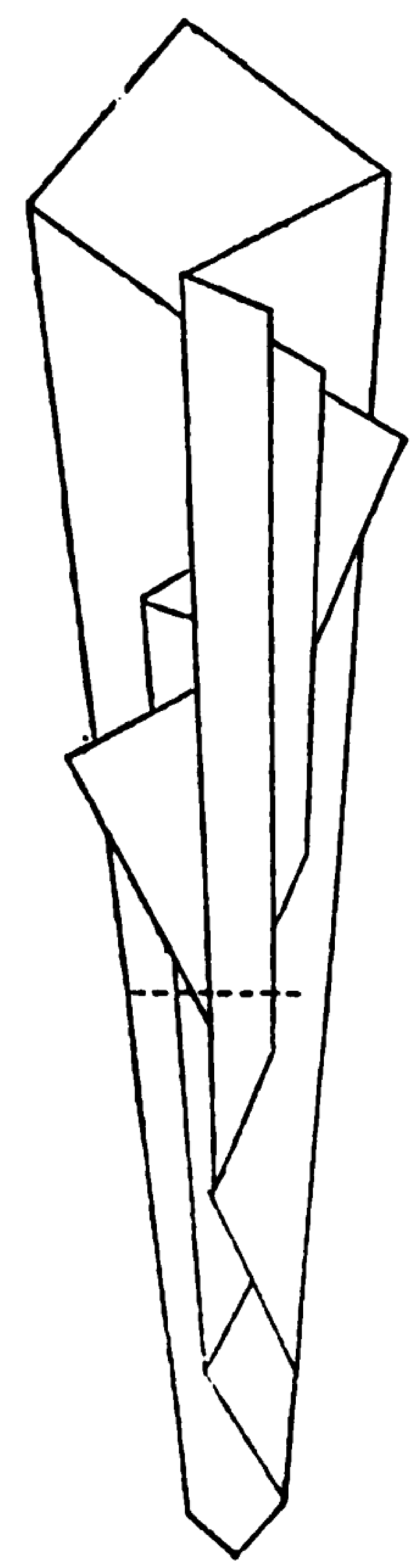
一　庖丁包　柄の方を包み、水引にて結ぶなり。



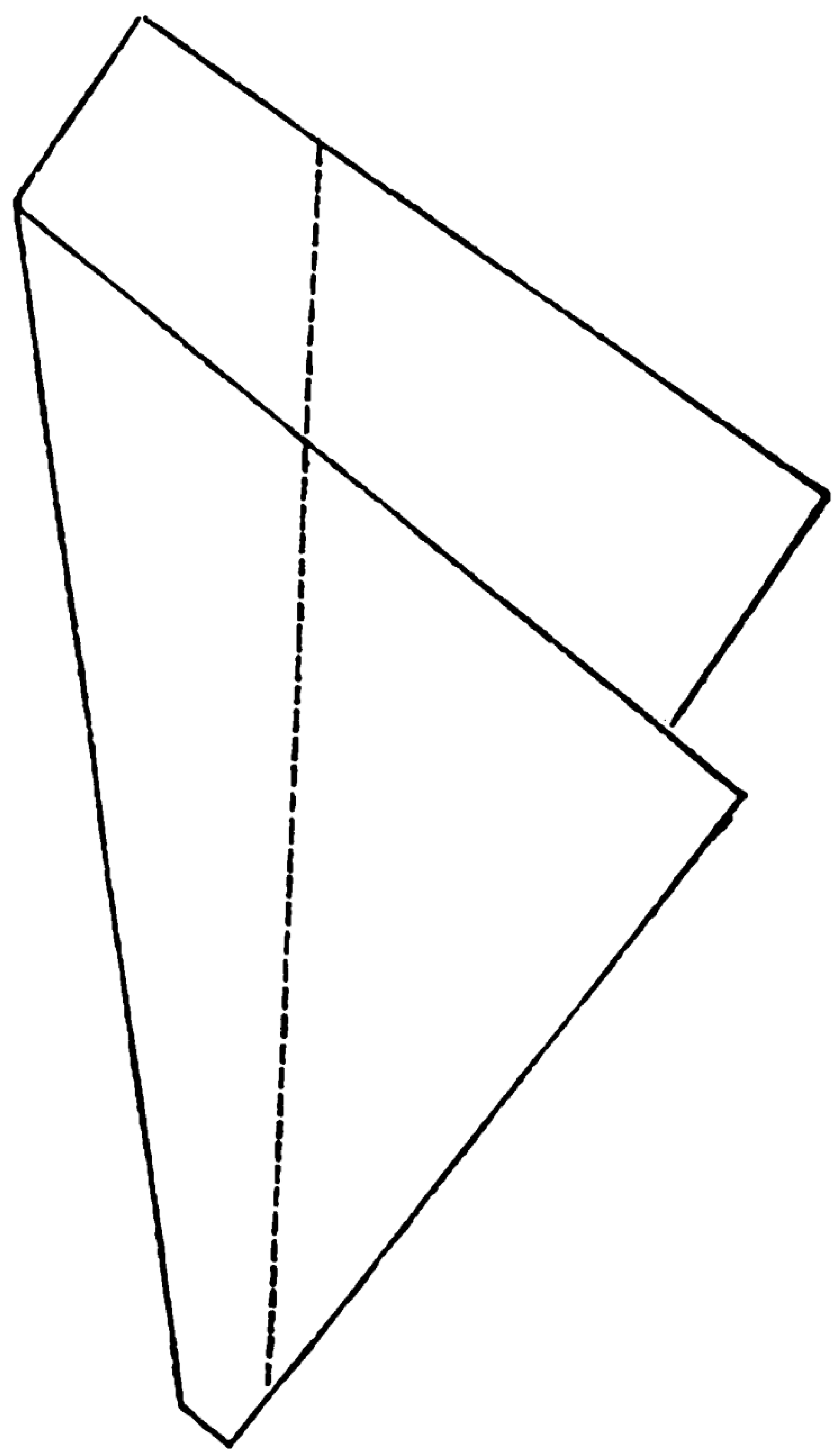
解



一　子木子包　羽子のこの事也、扇子包の通りに心得べし、

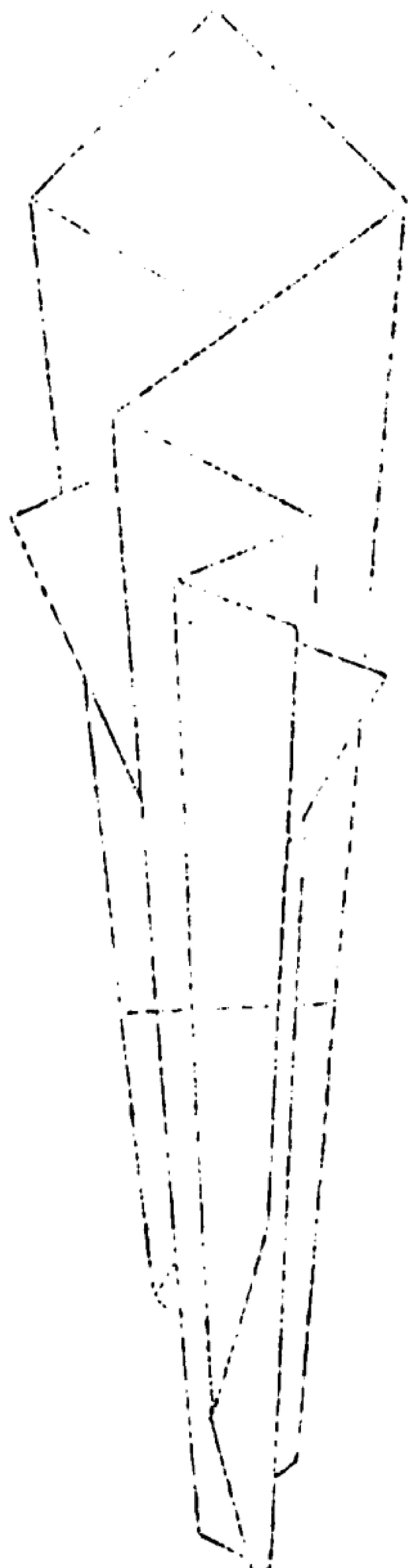


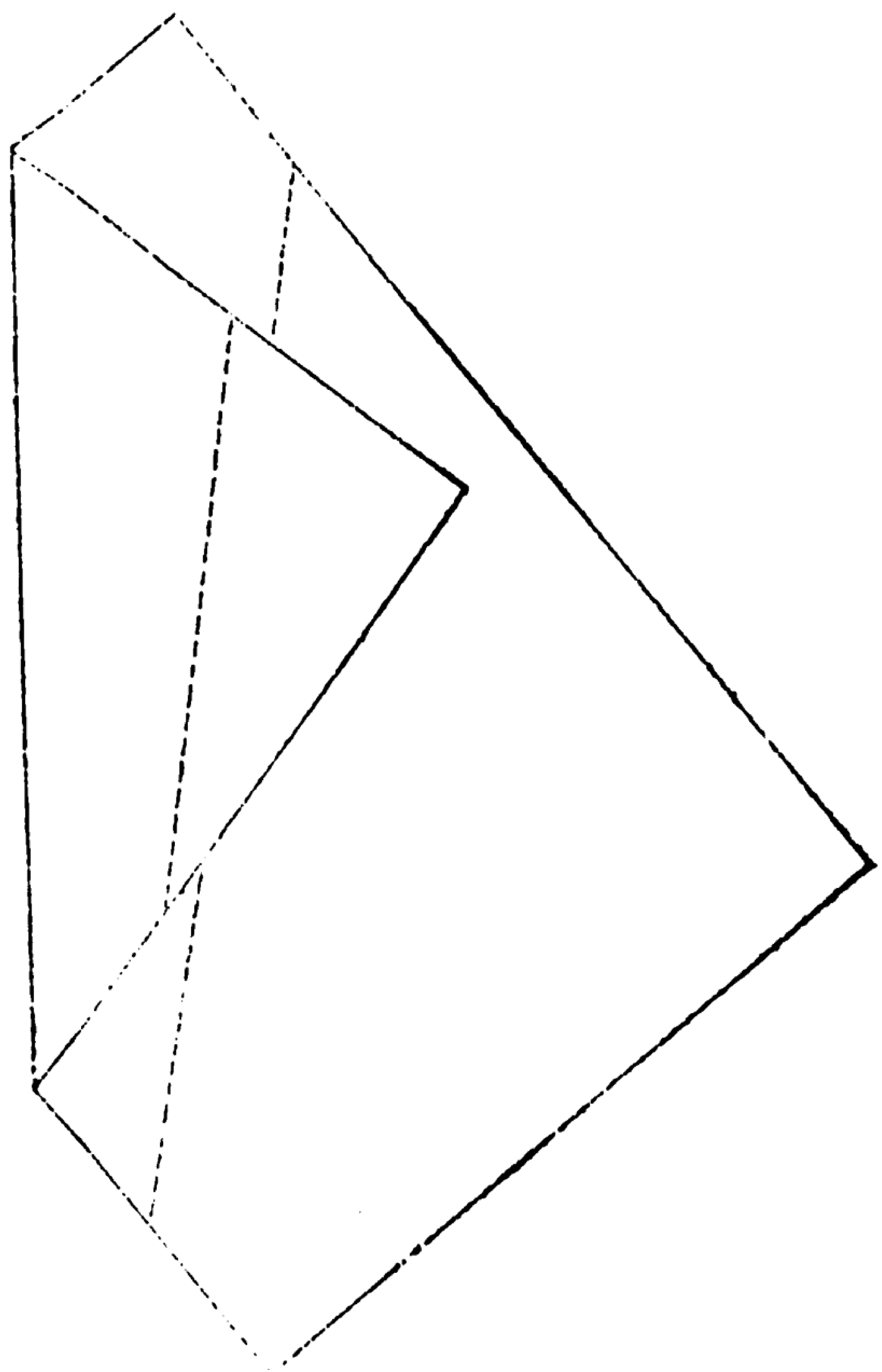
解



一子木板包　前に同じ、羽子板の事なり、

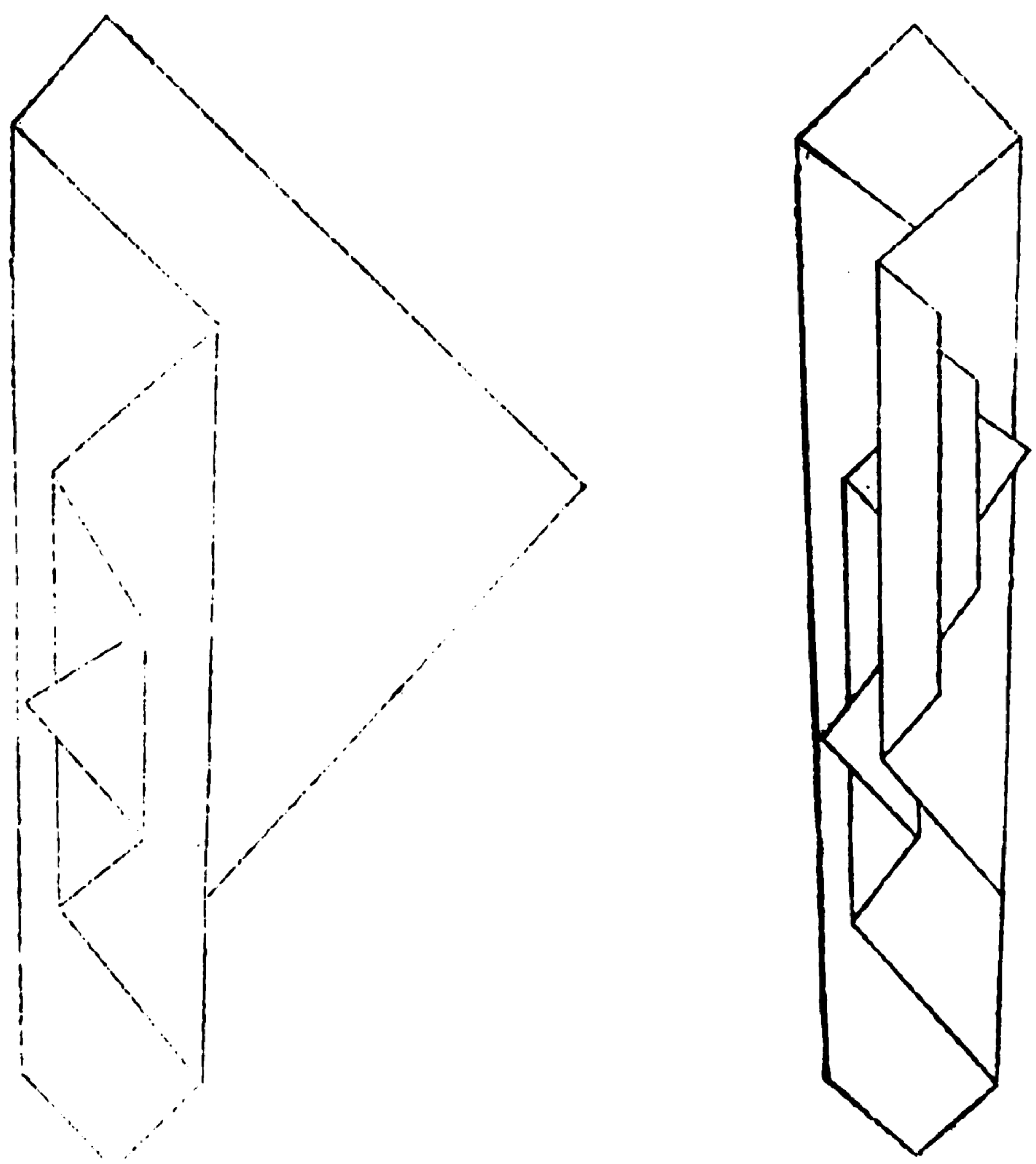
解





一 水引包、進物にする時は、水引を懸くる、黒棚、御厨子に用ゆる時は、水引掛けす、色紙にて包み、上書なし、

解



家政雜事（八）

餅。程經ても堅くならぬやう保つには、新しき空酒樽のかゞみを、餅を入るゝに都合よきほど切りぬき、その中に、餅を程能く詰めて、元の如く蓋をなし。冷かなる場處に藏め置くべし。入用の分だけ、其の度毎に出してよし。されど、酒樽の、未、乾かざるものに入れ、又は、温かなる場處に置く時は、乃、かびることあるべし。

鹽引の鮭。を、あま酒のもと（かたねり）の中に漬し置けバ、其の味、佳くなるべし。

白粉。まことの白粉は、鉛にてつくりたるものなり。されど、火にて燒けど、わき上りて、もとの鉛となる。次なるものは、黄赤色になり、下等のものは、白きまゝにて、色かはること無し。これ、雜物あればなり。近頃、西洋白粉は、澱粉にてつくりしものなれど、燒けて灰となる。是れにて、白粉の良否を識るべし。

漫録

沖繩縣下旅行日記（四）

まゝく庵主人

二十日　北谷をたちいづ。途より雨にあひて、ツボンなど泥まぶれになりぬ。野國村の井にて、水を飮みしに、衣洗ひゐたるものども、塗れたる泥など洗ひくれたりき、いづくにも、鬼はあらぬな

りけり、嘉手名分署にゆきて、こゝらに宿るべき家ありやと問ひあはせしに、こゝより半里ばかり脇にいれど、屋良といふ村あり、そこにゆけとて、小使に案內せさす、そこの村屋を今宵の宿と定めき。家は、新しかれど、敷物とてはすげ蓆にて、蠅蚊の多きこと、生れて始めてなり。飯はもて來ず、蚊帳はなし、さすがに惠まれたる煤けランプに向ひて、一人茫然たるところは、巡國修行者の、主なき庵寺に泊りたらむ心地なり、終夜、かくてもあられねど、寢所の用意す。まづ、風呂敷を褥となし、足のさきにはヅボン下をはめ、毛布を衾とし、頭の方にはシャツをかぶりてねぬ。去バしが程は、心地よくねたりしが、遂に、蚊のために起こされき。いま〳〵しさに、

蚊は、土腐溜の子なり、昔、荒ぶる神、神荒びに荒び給ひて、諸々のきたなき物を作り給ひし故、蓋、神代より、この親この子ありけらし。今より一千年ばかり、藤氏專權の昔にても、餘程、進步發達したりけむ。當時、有數の別嬪、清少納言に、蚤蠅とひとつ列に、いけすかぬにくきものよとはねつけられし艶話を殘せり。この後は、これに懲りて愼めるにや、人も忘れたるやうにて、わざまりうわざせずなりぬ。人丸、赤人の人人は、かれを苦しむる蚊遣火は、あはれといひおきつれど、それが苦艱はいはざりき、加賀の千代も、おきて見つねて見つ蚊帳のとまではいひたれど、遂に、一言の御情もかけず、近頃、白拍子の、末の流の濁りに濁りて土腐溜となり

しより、繼母ながら、義理にひかされ、漸く、七ッのお鐘のなるまでもと、浮名をたゝよはせぬ。あはれ、この一族、今は衰へたるか、否々、愼めるにもあらず、衰へたるにもあらず、ひとめの蚊帳を一重にはゝかりてなりけり、今宵、關所の除けられしに乘じ、聚り來りて罵りけるは、汝、元來、瘦我慢強く、知らざることを知らずとせず、これ知れるなりといふ顏搆へし、あの蚊帳一重を城郭とたのみ、散々に、われをいひくだすあさはかもの、人丸、赤人などは、唯、水にすむ蛙、花に鳴く鶯の外は、何事も知らぬ、氣のきかぬ輩なれどこそよ。聞ずや、檀林の元祖が、蚊柱やといひたてられたることゞを。その外、名人宗匠のいひおかれたることゞを數へあげなバ、曉に徹すべし。一族衰へたりなど、以ての外のことなり、汝等は、維新御改革のために、帶刀を禁せられたれど、われらは、猶、神代よりの利劍をもつ。且つや、われらは、石炭を堀り、鋼鐵を買ひいるゝ心配なくして、容易く、わが身と、わが劍とをはこぶ羽の舟あり、汝等の、蚊軍整理など、こと〲しく騷ぎたつとは、いづれ、兎に角、瘦せ我慢はよからぬこと、いふべきことは山々あれど、夜もあけがたになりたれどとて、どろ〲になりてあとかたもなし。驚きて、雨戸おしあけ、かなたの藪を屹とにらみ喝一喝して曰はく、

元來、利劍をもつといへども、身を護る用にもたゝず。又、大いに、敵を斫るにも及はず。

僅に、人の手足につきかゝりて、たゝきつぶされ、却りて、わが血を流す、羽の舟、なるほど、用ゐかたによりては、甲鐵艦にもまさるべけれど、進退のかけひきはさておき、その音ばかりを競ふ、畢竟、これ、又、こけをどかしにすぎず、空しく、煙にまかれたる時の逃げ道具となるのみならば、まだしも、紙障の破れ間などゆく時には、これが爲に、くゝりそこねてわらはるゝこと多く。この利劔もてるもの、この舟もてるもの、終生、なすところ、果して、何事、唯、暗闇にまぎれて人の膏血をすひとるのみ、やがて、曉の來るをも知らず、あはれかな、あはれかや。

廿一日　朝、疾く、漏池にゆく、村より、金武間切の方に六七合、漏池山の山根にあり。鏃形にて長さ百間ばかり、巾、廣きところにて五六十間はどもあらむ。これ、即、本島第一の大池なり。その深さは、幾尋あるやはかりがたし、身のまわり、二三尺もある鰻、年久しく住みて、この池の主宰たりといふ。又、當國の大豪傑阿麻和利は、この池のあたりの農家にて生れしものなりと。今に、その子孫、屋良村にひそみて、彼の亡骸を護り、秘して、人に知らしめずといふ。伊地知貞馨の冲繩志に、

長祿二年、尚泰、大城夏居數等を以て將となし、勝連按司阿麻和利を討じて、之を誅す。初、阿麻和利、驕傲不遜、竊に、簒奪の心を懐く。中城按司護佐丸、名は毛國鼎 人と爲り忠誠氣膽あ

り。阿摩和利の異志あるを知り、常に、兵馬を整へ、變に備ふ阿摩和利、爲に發せず、阿摩和利、密に首里に抵り、泰久に告げて曰く、護佐丸、叛を謀り、兵を聚む、其の未發せざるに及び、之れを誅せよ、泰久曰く、護佐丸は、忠誠の人なり、豈、不軌を謀らんや、阿摩和利、百方讒譖す。泰久、人を遣はし、中城を窺はしむるに兵馬を備へたり。泰久、大いに驚き、阿摩和利に命じて、之れを討せしむ。阿摩和利、曉に乘じ、中城を攻む。護佐丸、事實を陳せんと欲すれども、達すべきの道なし。乃、妻子を携へ先塋に詣り、嘆じて曰く、誰、何の罪ありて此に至る、天神地祇、吾が赤心を鑒せよ。將士、拒戰せんと欲す。護佐丸曰く、王命なり、背くべからずと、先、妻子を殺し。自刄して死す。臣屬自殺する者多し。乳母、護佐丸の幼子を負ひ、竊に、城を出で、國吉村に隱る。地頭查方山、護佐丸の寃死を憫み、篤く、之れを撫育す。後、泰久、迎へて護佐丸の家を繼がしむ。是より、阿摩和利、忌憚する所なく、益、兵を調し、中山を攻めんと謀る。阿摩和利の妻は、泰久の妹なり。其の從者に夏居數と云ふ者あり。勇武絕倫、人みな、夜叉大城と呼ぶ。其の反を知り、密に、阿摩和利の妻に告ぐ。妻、驚きて曰く、汝、善く吾が爲に謀れと。夜に乘じ、居數、阿摩和利の妻を負ひ、首里に至り、變を告ぐ。泰久、即、命を傳へ、兵を集む。阿摩和利、謀の露るゝを知り、兵を舉げ、首里城を攻む。會々、

招募の兵集まり、迎へて阿摩和利と戰ふ。阿摩和利、戰ひ負け、勝連に走る。泰久、居數を以て將とし、兵を督して追擊せしむ。阿摩和利、城門を啓き、出で戰ふ。中山の前軍披靡し、將に退かんとす。居數怒り、奮戰甚だ力む。二弟居忠居勇も、亦、殊死して戰ふ。阿摩和利、兵を斂きて城に入る。居數、婦人の衣を蒙むり、密に、牆を踰えて城に入る。阿摩和利、階上に立つ。居數、進んで其の首を斬り、大呼して曰く、既に、賊頭を得たりと。敵兵、畏服して降を乞ふ。勝連、盡く平ぐ。泰久、居數の功を賞し、紫冠を許し、賊の衣錦綺羅を與ふ。後、越來間切の地頭となり、越來親方と稱す。

これが、本島有數の大豪傑の、世に知れたる一生の大事業の本末なり。午後一時ごろ、讀谷山番所につく。道に、建武のむかし正成はなど、一齊にうたひ、隊伍をつくりて歸るにわひたりき。敎員の注意にて、各村の生徒を皆、かくの如くせしめて歸らしむるなりとぞ。いみじき好事なり。此地には、農民、皆、いそがしげに稻穗をおとし居れり。稻穗をおとすには、細き竹の折二本を藁にて縛り、それに、一二本づゝ挾みてこきおとすなり。內地にて用ゐる稻こき器械をもてるもの、間切の中にて、三人とはあらぬよし。今宵は、舊の九日なり。ひきしぼられたる弓張月にそゝのかされて、前の馬場を逍遙し、

月の夜やつれひとりあり影法師

とうめき出しはいだしつれど、貞徳のいかに思は

むと、いと耻し。こゝらの少女どもは、月のあかき夜、大方、この馬場のほとりに出でゝ、三味彈きうたひあそぶよし。今宵も、十一時ごろよりあそぶおと聞ゆ。(つゞく)

三卿三說(つゞき)

松野操雄

又、題をわかち候ふ事、一字題をバ、幾度も、下句にあらはすべきにて候、二字三字より後は、題の字を甲乙の句にわかちておくべし、結題を一處におく事は、無下の事にて侍るとかや、又、かしらにいたゞきておきたる歌の、無念と申すべし、ふるくも、秀逸共の中に、さやうのためし侍れども、それを本にひくべきにあらず、かまへて、あるまじき事にて候、但、又、よくいできたる歌みとりて、すべて、五文字ならで、題の字のをかれざらんは、制のかぎりにあらずとぞ承り置きて侍るべし、病の事は、平頭の病は、くるしからず、聲韻の病は、かならず、さらまほしう候、平頭の病も、なからんにはおとり候べく候、四病八病などは、人の、みな、しれる事に候へど、あたらしく勘じ申すに不及候、天性、病にをかされぬほどの歌になりぬれど、何の病もいたづらごとにて候ふべし、さて、よろしからぬ歌の、しかも、病さへ候はんは、又、いたづら事にて候はめ、三首五首乃至十首までも同韻をよむ事は、心あるべきにて候、めづらしからぬ詞は、あまた所によめるもくるしからず、耳にたつ詞のめづらしき

は、なが詞にて候はねども、二字三字も、あまたよみつれど、あさましき事にて候、地體、其の詞をこのむよと、人にきゝなさるまじき事を、あさからず、亡父卿も制し候ひし事に候、げに、又、わろくおぼえ候、雲風夕暮などやうの詞は、いくつよめらんともくるしからましとおぼえ候、それも、よからん歌のすてがたからんは、いくらもおなじ詞をよみ、すべて、さても候ひなん、無下のゑせ歌の、みだりがはしく、おなじ詞をさへよみませたらんは、いとよからじにて候、當時、曙の春、夕ぐれの秋などやうの言葉つゞきを、上なる好士共もよみ候事、いたくうけられぬ事にて候、やう〳〵しげに、明ぼのゝ春、夕暮の秋などつゞけて候へ共、唯、心は、秋の夕ぐれ、春の明ぼの

をいでずこそ候ふめれ、げに、心だにも、詞をおきかへたるにつきて、新しくも目出度も成り侍らんは、尤、神妙なるべく候ふを、すべて、何の詮ありとも見えず、ことに、そこがましき事にて候、これぞ、歌のすたるべき躰にて候ふめる、かつは、いま〳〵しき事と、返々、申し置き候ひし、先にしるし申し候ひし十體を、人の氣の趣を見て、さづくべきにて候、器量も、器量ならねも、うけたる其體侍るべし、或は、幽玄體をうけたらん人に、拉鬼體をよめとおしへ、又、長高樣を得たるともがらに、濃體をおしへば、何かよく候ふべき。只、佛の說き賜へるあまたの御法も、衆生の機にあたへ賜へるとかや、それにすこしもたがふべからず、我がこのむやうゝけたる姿なれどとて、此

の體をよめど、えざらん人におしへ候はん事、返返、道の魔障にて候べく候、其の人の、よめらん歌を、よく／＼見さだめて後に、風體をさづくべきにて候、何の體をよまんにも。なをくだゞしき事は、わたりて心にかくべきにてこそ、されバとて、又、其の一體に入りふして、餘體をすてよとには候はず、得たるところを地盤として、正位によみ、すべて、餘の體をよまんは、くるしう候ふまじ、たゞ、正路をわすれて、あらぬかたに趣くをつゝしむべき事とぞ覺え侍る、今の世にも、歌をならべて奉るに、達者のおもひをなしたる咎め、大分この趣をわきまへかねて、たゞ、わがよむやうをまなべとのみおしふる事、無下に、道をしらぬにて侍るべし、もし、われよりこえて

物をもたかく案じすぐれたる姿を、天骨によまん人のあらんに、かやうに提撕しては、何か宜しく侍るべき、俊頼朝臣、清輔朝臣の庭訓抄にも、このよしをぞ、まゝ、申しためり、かまへて、邪におもむく處をぞ、いかにもまもりおしふべきにて候、如法器量なる人も、おしへをうけずして、雅意にまかせてよみゐたれバ、口の自然に、邪におもむく事の候也、まして、非器のことに、われと、只、おさへてよみならはんとしては、あしくはなりゆき候へども、わかる道は候はず、凡ては、歌をよく見分て、善惡をさだむる事が、まことに、大切の事にて候、只、人ごとに推量ばかりにてぞ侍ると見ゑ候、其の故は、上手と世々にいはるゝ人の歌をバ、いとしもなけれども、はめあひ、い

たく、もちゐられぬ類の詠作をバ、抜群の歌なれども、結句難をさへとりつけてそしり侍るめり、只、主によりて、歌の善悪をわかつ人のみぞ候ひめる、誠に、あさましき事とおぼへ賜へる、これは、ひとへに、是非にまよへるゆゑなるべし、おそらくは、寛平以往の、先達の歌にも、善悪のわかたれぬ人ぞ、歌の雌雄を存ずるにては侍るべき、かくまれるよしみは申し侍れども、愚さめ、つや／＼辨へ得たる所侍らずこそ、さりながら、さして卑下すべからざる事とぞおぼえ侍るは、元久の比、住吉參籠の時、海月明なりと、宜き靈夢を感じ侍りしによりて、家風にそなへんために、明月記を草し置きて侍る事は、身には、過分のわざとぞ思ひ行る、かやうのそゝろごとさへ申し侍る事、いとかたはらいたく覺え侍る、又、古詩の詞をとりてよむ事、凡、歌にいましめ侍るならむど、ふるくも申したれど、いたくにくからずこそ、まけうこのまで、時々、ませたらんは、一ふしある事にや侍らん、常に、白氏文集第一第二帙の中に、大要の所侍り、かれを披見せよとぞ申し置き侍り候、詩は、けだかくすますものにて候、尤、歌よまん時は、高人の御前ならバ、心中に、ひそかに吟じ、さらぬ會席ならバ、高吟もすべし、歌には、先、心をよくすますが、一のならひにて侍り、吾心に、日頃、おもしろしと思ひえたらん詩にても、又、歌にても、心にそきて、それを力にてよみ侍るべし、

（つゞく）

道のしをり歌あはせ　(二)

久志本常幸寄贈

暮れぬとてまづ灯火ぞいそがるゝ
　日影をきほふこゝろならひに

よるてらす草のほたるを集めても
　見ぬ世の事をたづねつるかな

道をまなぶる心ざし、つとめて、時におくれず、かくの、如く、夜を日についでぞ、はげむべきわざなるに、過ぎて又こぬ月日を、いたづらにすぐしなむ、悔のやちたび、悲しきをいかにもせむ、これらは、人の母となりて、子をおもふしたつるのこゝろえになん、

　集めては國のひかりとなりやせん
　わが窓てらす夜半のほたるは

ひさかたの月のかつらも折る斗り
　家のかせを吹かせてしかな

さふらひの、身をたて道をおこなふをしへ、家國ををさめしることわりを、能くまなびてこそ、國の光をもかゝやかせ、家の風をもおこしなん、いたづらに、この文をもてあそびものとして、吾道をなぐさみごとにせんは、五車の書をよむとも、まなばざるに同じかるべし、

君のため、民のためぞと、思はずを、雪も螢も、何かあつめん、と、何がし關白の讀み賜へるは、いと〳〵、有がたくこそ、

　埋れぬのちの名さへやとめざらん
　なす事なくて此の世くれなば

おもふには一つは人にまさるべき

業をもしらぬ身をやなげかん

下ざまの境界の、野にたがへし、市にあきなへる、事しげき身は、いかにせん、それだに、まゝ、心ざして、まなびの道に心そむるもあるに、さいはひに、禄をはむ家にうまれて、もの學ぶべき暇ある身の、何なりとも、一藝に達して、なき跡まで、朽ちせぬ名こそあらまほしけれ、さるを、徒に、あかしくらして、なにの得たる一節もなく、草木と共に、朽ちはてらんは、口惜しからぬかは、

たづねずは甲斐なからまし古への
　代々のかしこき人のたまづさ

手もふれぬ人の爲にはいにしへを
　しるせる文のしるしやはある

父祖の代に、書おほくたくはへて、あまたの巻々を、家に積みながら、子孫、愚にして讀むこと能はず、猫に小判と云ふ諺のたとへの如く、徒に、しみの住處として、むしだしくさらせ、手にだに觸れざるうたてさ、如何にせん、

道しらぬものならなくにあし曳の
　やま踏みまどふ人もありけり

いにしへのみちにまかせむ夏草の
　事しげくともなにかまよはん

さぶらひの家に生まれ、道をわきまふべき身にして、道ならぬ事、しいでんは、殊に、其の罪をもかるべし、かるが故に、つとめて、書をよみ、いにしへの教を學びて、その道を明らむべきことになん、いかめしく、刀をさし横たふるばかりを、士とはいはじ、

道しあらバ我が世もなぞか去ら雪の
　ふりにし跡にかへらざるべき
きえてまたともしつゝてふ光にも
　絶えたる道のかくれとぞ思ふ

いにしへを慕ひて、廢れたるを興し、絶えたるを繼ぐの心ざし、上つ方は、まして、かくおはしますべきことなりかし、

くもりある心をおもへ去らたまは
　かけても磨くためしやはなき
浮雲はたちかくせどもひま漏りて
　そら行く月の見えもするかな

すべて人と生まれたる心の德は、うぶにいみじき性そなはれり、鳥獸のごとく、淺ましき物にはあらじ、さるを、月に雲のかゝれるが如く世のならはしの俗情に引かれて、心のひかり掻き曇り、きえ〳〵になりもて行くぞ悲しき。然はあれど、もとより、天性の德なれど、折に觸れ、ものゝあはれに催はされては、すゞろに、なさけの心もおこり、恩義のために感じては、おのずから、頼もしき氣の立つなど、正しく、人たる本性の顯はれぬるものぞかし、されど、道を學びて、德を磨くは、みづから、浮雲のくもりを拂ひ除きて、心のうちに澄む月をなん、明らけくするにありける、人にして、人たる道を行ふなれバ、身になき物を去ひもとめて、勉むるにはあらじ、など、よくし難き事にあらん、たゞ、心ざしの立つとたゝざるとによることなり

みちのくの千賀の鹽釜ちかながら

遥けくのみぞおもはゆるかな

通ひなれてあづまも近し足がらの
　せきぢはるかに思ひしかども

これを思はざるなり、それ何の遠きことあらんと、ひじりの諭し賜へるは、云ふも更なり。おほよそ、世の中の事は、思ひわづらひて、氣を屈しぬれば、さのみむつかしからざる事も、うむじおこたり、勉めて、氣を引き立てゝ、敢て、勵まし行ひぬれど、遠き道も、大いなる事も、おもひの外に、容易く遂げ果たすものぞかし、

海山の、おもひやられし、はるけさも、越ゆればやすき、ものにぞありけると、かく、事はかどらず、業ならざるは、氣に勇なく、心ざしの立たざる故になん、ひたぶるに、心ざしだに立ちなむ何事か成らざらん、

なせばなる、なさねはならず、なるものを、ならぬといふは、なさぬなりけり、豈、然らずや

よそにのみ見てや止みなん葛城や
　高間のやまのみねのしらくも

筑波やまはやましげやま繁れども
　おもひ入るには障らざりけり

いでや、志を奮發して、あながちに思ひ立ちなば、いかなる高峯も、攀登りつべし、いはむや、斯道をまなぶは、もとより、我が身もとの事なるをや、

庭つくり　　松平樂翁公

ある人、庭このみて、こゝに山築きて、この木を

植ゑ、こゝに池つくりて、岸邊に何うへんなど云ひけり。何時つくるやと問へど、まつ此の木を此方へうつしぬべし。この木は來ん春うつし、これは秋うつしなん。うつし終りて、池を堀りて、其の土もて、山きづかんと云ふを、例ものいそぎし賜ふに、これ計りはいと心長きことの賜ふ。二とせ三とせにては、いまだ全き山水の景色はなさじといへど、此の木今植ゆれバ、枯るゝ事を、眞に知れバ、いま植ゑんの心はつゆもなし。これは立冬のころ、かれは立夏のころ植うべし。此の草は淸明のころ植うべし。いま見て、をかしと思ふバかりの大いなる木、山なんどに植ゑたらバ、枝も枯れなどして、風景をそんずるなれバ、五六尺の若木うゑて、この山にておのづから長ずれバ、心の外の景色をなすものなり。いかで二年三年に全くうなはるべき。十年もたちてこそをかしうも見るべし。いま假にすべきものならぬ事を、眞に知りぬれど、初めより物いそぎする心は露もなし。いちはやく功なさんと思ひ賜ふは、木草植ゆる時を眞に知り賜はざる故なりといひき。げに知るも同じく知るなれバ、眞に知るにあらざれバ、知るとは云ひ難し。古の釣垂れし人も、直に時をバ知りにしなりと、また人にかたりしとぞ。

信棒柔和縄　故　小山田與淸江戸の人

人いかなる魔賊襲ひ來るといへども、信棒をもて之を打倒し、柔和縄をもて之を縛せんには、少も、おそるゝにたらず。

信棒は心保なり。一名正直棒とも號す。棒の如く

正直にて、ゆがみまがらざる心の中の操の、松柏の中心あるが如きをいふ。天道は、信を貴び、地道は、誠を貴ぶ。誠信にまされる、安心堅固の城郭、陣處なく、金剛山も、衆魔外道も動すと能はざるが如し、

柔和繩は人和繩なり。その人に和しまつはること、強からぬ繩にたとふ。一名臨機應變繩とも號す。俗に、男は爪を丸く剪りて、心を方にもて。女は爪を方に剪りて、心を丸くもてともいへり。淮南子に、内に一定の操ありて、外能く詘伸し、贏縮し、卷舒して、物と推し移るといへるは格言なり。

禮記に曰はく。禮は宜に從ふと云々、

論語に曰はく。禮の用は和を貴しとすと云々、

漁父の辭に曰はく。聖人は物に凝滯らずして。能く世と推し移ると云々、

宋の王遂が曰はく。屛風の如く屈曲して俗に從ひ、能く風露を蔽ひ、言能く物理に乖かざれ云々、

明惠房曰はく。人はあるべきやうと云々、

余之を方言に譯して曰はく、ゑよさいなくと云々凡て、方直に過ぎて身の災を引き出す事、少からねど、心すべし。晉の李密が性、方直にして意を勢位に曲らずして、荀勗、張華が爲に左遷せられたる類、數ふるに遑あらず。又唐の郭子儀は、忠誠を竭して君に事ふ。故に君の心疑ふ所無し。厚德を以て圭角を露はさずゑて小人に處す。故に讒邪能く害する事なかりしとぞ、

そもそも人の世事の敵に對せんには、信棒を本陣とし。臨機應變を先鋒とせむ敗を取る事稀なるべ

し。去れども、之を計ることは人にあり。成敗は天にあり。運傾きたらん時の用心に必死の後陣と定むべし。女子は柔弱を常とすれど、人に勝つべきいはれなれども、此三を以て心とせば、いかなる魔賊に當るとも敗を取る事無く、運極りて敗れたらんには、必死の後陣に身を措かば、いかでかはづかしめをうけ、笑を後世に取るべけん。召南の申女が、必死を要して、節義を守り、息君の夫人が、人生要ず一死而已といひ、楚の伯嬴が、生きて辱しめられんよりは、死して榮ゆるに去かじといへる類の鐵石心をも思ふべし。

女畫師

其五

乙羽庵主人

女畫師の池旭は、京都守護職松平肥後守の御抱ゑ畫師となり、日毎に表と奥とに出入して、丹青の技に勵み、花鳥を畫き、山水を寫して、殿の心を和らげ、奥に手本を上りては、その御寵愛一方ならざれど、蝶と暮れ花と過ぎ行く月日さへ、足らぬもの無き住居して、何時の間にやら慶應二年の秋とはなりぬ。

其年八月二十日の事なり、時の將軍德川家茂公は、京都表にて御他界ありけるより、上を下への混雜一方ならざるに、別けて此頃は世の中何と無く物騷がしく、御軍役の御改正、鐵砲調練の御催促あるが中に、御軍服も筒袖黑の陣羽織ダンブクロ杯を用ゐて、只管西洋をのみ眞似給ふ折なれど、人心恟々として穩かならず、今にもあれ攘夷黨が事を起して、京も江戸も修羅の巷に變るべしと、世間の口に戸の閉てられぬ淺猿しさよ。

世の亂れたるに覘入り、天も災をなすにやあらむ、慶應三年の六月は、去かも水無月の燬くが如き暑さなるべきに、冷氣頗る烈しく、諸人袷を着する程なれバ、風邪熱病流行して、醫師の藥籠西に飛び東に馳け、昨日までは門前雀羅を張りたる藪庵老も、疝氣に痛む腰を伸して、鶴の九皐に翼をひろぐる如く、反をうつて大道を往來する顏の勇ましげなる。

頓て其年の暮ともなれるに、押借強盜數多世上に出沒し、良民を窘むること甚しく、江戸は殊更物騷がしくて、人は注連繩よ門松よと勇むべき時なるに、二の丸の炎上、續きて芝薩州侯の屋敷を取毀つなど、いよ〳〵穩かならぬ中に、早くも明けて慶應

四年の春とはなれり。

早春より伏見鳥羽に戰爭ありて、人心安堵の心地無き折から、正月十一日夜將軍慶喜公は去年より大坂表へ御進發ありしが、俄に滊船にて江戸に歸り、二月より東叡山に籠らせられし次第とて、松平肥後守も京都守護の職を辭退し、將軍に隨行して江戸に下られしも、何か仔細のお在しましけむ、一旦本國會津城下に歸られければ、池旭も隨行して、蔦の細道露踏み分けて、陸の奥にぞ下りける。

南郊に梅花散り、東山に櫻開きて、長閑き春は來れども、人は武にのみ荒みて、劍を按じ、銃を磨く程なれば、鳥も調練の陣太鼓に驚き、花も砲聲の響に散りやしぬらむ。池旭は會津城中に養はれて、つら〳〵亂れ行く世の形勢を見てけるに、亂麻とは斯かる事をや云ふらむか、德川の長流今全く涸れて、八萬騎の旗下は轍鮒の微に蠢くが如く、筋骨無き武士共のみ、朱塗の大小を杖になして、よろぼひ遁げ行く腑甲斐なさよ、今日までの祿は何が故食みしぞ、妻子は誰のお庇陰にて養ひしぞ、江戸は穢土なり。關東の男は相手にならぬと、野次馬に出でたる奥羽諸藩が、却て係り合ひも無き喧嘩を買ふて、幕府の罪を背負ふてやれば、薩長士の兵子組も、江戸


応需



の響を長崎で討つ心得にて、頓ては奥羽征討の軍を差向くることゝはなりぬ。斯かりければ彰義隊脱走の强者ども坏、三界に身を容るゝ餘地無きを幸ひ、會津に遁れて救命を頼むに、此方はかねて期したる事とて、なんでう猶豫なすべきや、旗を揭げ城に據りて、終に對戰の用意をなしたるより、さてこそ大事に及びしなれ。

今宵は月のあるべき夕も、雨もよひの空合なれど、雲低く垂れて天墨の如し。頃は文月の初旬なるに、風死して會津城中一點の涼味無く、此所彼所に焚ける篝火の暗處を照らして、何と無く物凄き陣中を、悠々と巡視する婦人あり。丈に餘るべき黑髮を散らして、白き絹の額卷をしめ、精悍しく襷綾取りて、右手に細身の長刀を持ちたり、夜目ゆゑ確と判らねど、色白く眼中凛々しき女丈夫なるは、篝火の輝く方に、弗と顏を俯向けたるにて知られぬ。女丈夫は眼を瞋りて、拮と樹の間を睨み、忽聞ゆる足音を聞き咎めて。此方へ寄らせ給ふは何人なるぞ、妾ことは御臺樣の御近侍小池池旭といふ女畫師なり、奥向へ御用御座らば妾これにて承はるべし、若しまた御內々の御用とならば、御庭口まで御案內いたしませうと、長刀小脇に抱ひ込んで、寄らむ切らんと搆へたる。寄り來し男も油斷せず、樹の下闇を透し見て。おう

池旭どのか、拙者は御用人林郡太夫で御座る、急いて間違ひし給ふな、實は殿より極内々の御用を吩咐かり、わざ〳〵推參いたしました、何うぞ其旨御臺様まで御取次下さりませと、一禮なして陳べ立てたり。池旭は直に奥殿に入り、右の次第を言上すれど、戰場ゆゑ無禮は許す、郡太夫此方に呼べとの嚴命に、斯くと告ぐれど雀躍なし、早速次の間に伺候せり。

殿よりの御用は如何なる儀ぞ、語れ聞かうと乘り出し給ふを、郡太夫は悄れかへりて。されどで御座ります、石莚の間道を敵に破られ、味方目前に利を失ひ申しました、それによつて御婦人方も、今より御出陣遊ばすやうにと、四邊をジッと睨み詰めぬ。

明日ありさおもふ心にはかられて
けふも空しくくらしぬるかな

文林

冬夜　　近衛　忠熙

老の身は夜寒いとひてあつぶすま
かさねん冬になりにけるかな

冬月　　東久世通禧

かも川や淺瀬のなみはかはらねど
千鳥のこゑにさゆるつきかな

鍋島　直大

薄雪の降れりと見しは庭のおもの
芝生にさゆる月にぞありける

冬夜　　前田　利嗣

おく霜の夜深きねやに冴えわたる
鐘のと聞くもさびしかりけり

氷始結　　黒田　稍綱

冬といふまるしるかりに結びけり
あさ日まつ間の池のうすらひ

冬夜　　長岡　護美

ふゆの夜の長さもわかで掲げたり
一人ふみ讀むまどのともし火

前田　利鬯

埋火のすみにもまものいろ見えて
ころもで寒く更くる夜半かな

河水　　津守　國美

嵐のみ吹きさゆる日は閉ぢ果てゝ
みづも音なきふゆのたにがは

寒松風　諏訪　忠元

ふゆ深みみどりの色はかはらねど
おとはさむけき松のさよかせ

冬夜　黒川　眞賴

かたしきの衣手さねてきりぎりす
鳴かぬ霜夜となりにけるかな　小出　粲

罷出つるやがても暮るゝ冬の日は
よる計りこそ我が世なりけれ　植松　有經

ぬば玉の夜は未さしも更けなくに
寒さは身にもしみわたるかな　三浦　千春

冬松

木の本に落葉しきわたし松さへも
ふゆごもれりと見ゆる庭かな

角屋助三郎が妻まさ女　佐々　豊水

はゝと見ねしおのが姿の月かげを
見ればいよいよ慕はしきかな

冬月　草野　隆道

白ゆきの色もひとつに見ゆるかな
山の端いづるふゆの夜のつき

水邊寒樹　野崎　宗英

すゝみせし磯のまつはら冬されば
汐かせさむみ訪ふひとのなき

爐邊歳暮　鍋島　榮子

物皆のまうけも果てゝうづみ火の
わたり長閑にくるゝとしかな　栁原　愛子

とし思ふ日數もいまは埋み火の
有るか無きかにのこる年かな　小池　道子

埋み火のおもひ起しゝこともみな
あとなく消えて暮るゝ年かな　松平　健子

うづみ火の邊によりていはけなき
むかしを忍ぶとしのくれかな　鳥尾　廣子

埋み火を友となしたるおいびとも
いそがしげなる年のくれかな　鶴　久子

こん年のあらましことを語るまに
火桶のすみぞはひと成りぬる

火桶のみえたしまるゝは又ひとつ
おいの加はるしるしなるらん　中島　歌子

谷川氷

さえわたる嵐やこほるたにがはの
水のおとさへむすばゝれつゝ　三輪田眞佐子

歲暮述懷

文机にむかふ日かずもくれたけの
ふしのまにころ年はいぬめれ　諏訪　晴子

歲暮雪

何時しかに暮れ行く年とつむ雪と
とり重ねてもをしの毛ごろも　尾崎すう子

田家冬

賤のをがをしね苅りはす秋過ぎて　海上　[illegible]子

をだのいほりは守る人もなし

冬旅　師岡須賀子

はるたゝむ櫻かざしてかへるらん
今日ゆき分けて旅にゆくひと

氷　片岡光子

けさの間に瀧つ流れてさえ〳〵て
凍りやぞめしおと絶えにけり

暮を惜しみて　西ゆた子

降る雪のけぬがうへにも積れかし
くれ行くとしの道まよふまで

海邊寒蘆　松浦辰男

わし原の冬枯れわたる　濱面を今日來て見れど
見えざりし沖の島やま　みえざりし海士の釣舟
ことごとく見え渡り鳧　蘆原のしげきはま邊は
村蘆の枯れたるよりも　中々に枯れぬさきこそ
さびしかりつれ

松の雫　千稻子

其二　日野の里（承前）

はるも半になりぬれど　雲かあらぬか山の端に
櫻咲きそふたのしさに　うたふ雲雀の聲たかく
みづ音かすむ日野川の　岸の蘆邊にたづ騒ぐ
花に狂へるてふ小てふ　よはの嵐にゆめ覺めて
ちらふ櫻のかげあをく　昔をしのぶ袖のうへに
卯の花降しふり布きて　そらに一聲ほとゝぎす
いづこの空に迷ひてか
遠く見下るひむがしに　嵐や立たん彼のくもは

あめや降り來ん彼雲は　あはれ嵐の吹けよかし
嗚呼水雨の降れよかし　烈しく吹きて拂へかし
こゝろ根曲りし賊等を　まよひに迷ひし族をも
洗ひそゝぎて日の本の　正しきみちを興せかし
わが身もいまは徒らに　くる日を迎る時ならず
只いたづらに袖ひちて　嘆き悲しむときならず
ひらがり狂ふさ蠅をバ　かりて拂ひて盡さんは
仰て御靈のみこゝろぞ　此の御心を遂げんには
わが子雄々しく育みて　かたねに草はむす迚も
月のひかりに我が骨を　晒さん迄に生ひ立てん
からの煙は絶ねずとも　この御心を遂げざれは
夫の御靈も甲斐なしと　怨みたまはん天がけり
このごろ聞けど上野の　やまに河邊に我が君の
新田の御子等うち集ひ　君の御爲にくにのため

いつさ整へたまふとか　そうなの身とは云ひ乍
縱甲斐なき身なりとも　命のつゞかむ其かぎり
ちからの有らん其限り　助け奉らんいでやいで
返さじかへじと一筋に　ふるひおこせし眞木柱
動かぬ心ぞゆゝしける
やがて淸若よび寄せて　旅たつ由を說き聞かせ
面をつゝむいちめがさ　つゑを片手に唯ふたり
うみやま遠き吾妻路に　迷ひいでしぞ哀れなる
門田の早苗みづ增して　かはずは噪ぐ悲しげに
かせになびける青柳の　露はみだれぬ我が袖に
短かけれども朝ゆふに　つゆ霜凌ぎし此の庵を
みすてゝ出る我身はも　籬にはふ卯のはなは
又みる時のあるべきか　淸き瀬音はいつの日に
又きく時のあるべきぞ　みかへりながら佇めバ

ひのゝ打にわしをよぎ　吹き來る風は膚さむし
眞木もしら太敷き立てゝ吾妻路に
たび行く君がこゝろ根あはれ

歳の暮

尾崎すう子

明治の二十とせあまり六とせの暦の軸も、あらはになりゆくまゝに、老のくせとて、つら杖をのみつくづくと、つくゑの上を打ち見やれど、枕の艸子の開けたるを見るとはなしに、あなたこなたを繰り返せど、穴かしこ、かゝるかしこき婦人の、上つ世には、小指折り返へす迄にありつる物を、またはしの世にも有りつる哉、今の世になしといふには侍らねど、我が身、むなしく世に老い朽ちて、隣の花さへしらぬ顏に、過ぎ行く春のみ多きなれば、他の事はしらず、身一ッをなげくなり、いかにもして、今の世の姫達よ、上つ世のかしこき婦人にをとらずして、猶、一際美くしき節を、後の世に迄殘させ給はゞ、悔いて返へらぬ老のなげきもあらじかし、或は、外つ國人のくばかなる目をそゝぎ出だして、目出でくつがへる程に、よろづの事のあらせ給はゞ、いかにうれしき事ならんよ、むかし我が友なりし人の、何事も、くだりゆく世にならはぬは、人にまけじの心なりけり」と、よまれし言のは、今更にゆかしく思ひ出だして、世の姫達に、一言御はなしまうし上侍るになん、穴かしこ、

雪のふりけるあした竹を見て

竹園

あな寒し、あな夜長しとひとりごちて、殘りすくなき埋火、かきをこしつゝ、あたりを見るに、窓のすき間、漸にしらみそめたり、やがて、おき出で、雨戸をしひらけば、夜のまにやふり出しけむ、雪、いたうつもれり、木々の梢は、さながら、銀の花咲きたるごとく見ゆる中に、枝さしをかしき松のもとなるやぶかうじの、なかばうもれて、赤き實のふたつみつ見ゆる、繪にかきたらむやうなり、つねに、めなれし庭ながら、何となう、ものめづらしきこゝちせられて、しばし、はし居しける程に、雪げの雲、なごりなく、晴れわたりて、朝日、うらうらとさしのぼりぬ　まがきの竹の一本ふたもと、雪をはらひておきかへるさま、いといさまし、あはれ、世の人の身も、かくぞ有りける、長き年月を送り迎へるうちには、さまざまのわびしき事有るべし、うしつらしと思ふあまりに、身をあやまつこともすくなからず、此の竹も、雪のつもりたるほどは、いかばかりわびしかりけむ、心よわくて、折れはてなば、いひがひなかるべし、そをたへしのびて、時をまちたればこそ、かく、みさをもあらはるゝなれ、たゞ、何事も、よくたへしのぶを心とはすべきなり、

降りつもる雪にたわみてなよ竹の
　をれぬこゝろをこゝろとはせむ

いますこし、よみさまもあるべきを、折しも、またしき友の訪ひ來にければ、そがまゝに打ちおきぬ

雜報

●昨日といひ、今日とくらして、あすか川、ながれてはやき、月日なりけり』げに、流れて早き月日なりけりや。流れて早き月日とは知りながらも、あだに過ぐして、年の暮になれば、誰も彼も、今更のやうに、この歌唱ふこそうたてけれ。春道列樹ぬしよ。地下にありて、いかに思ふらん。編者なども、女鑑の上よつきて、心に期したりしことも、數々ありつれど、十が一もなし終へで、遂に、今日となりぬるものから、いまさら、せんやうもなければ、いつものいひ草のやうなれど、こん年よりは、力のかぎり、心のきはみ、盡くしに盡くさん心構なれど、四方の娘嬢をか、心得たまひてよ。

●野村望東尼の話（つゞき）元治二年十月二十三日、（此の時は、俗論派の勢になり、姦計を擅逞うして、大獄が起つた節であります、）望東、姦人に從ひ、其別莊にて、同志會議し、且、旅客を潛伏せしめ、女子に有るまじき行をなしたれば、一道にも處せらるべき處、憐愍を以て、流罪に處すとて、姫嶋に送られました、此島は、玄界の西南に當り、遙に烏帽子島に對し、烈風激浪の烈敷所であります、此の海邊に、小獄を造りて入れられました、夫より、牢中に起臥し、艱難辛苦の中にも、なほ、國を思ひ、世を嘆き、感慨の志想は、獄中で讀だ歌に歌れて居ります、同志の輩二十四人、死刑に就きし事を聞きて、

御世のため心づくしの武士の
　命にかはる我身ともかな

此の歌は、尼が、滿腔の精神を吐露したものと見えます、其の理は、處刑前に、度々、詮議を受けました節に、望東、申立ますには、私は、素より、婦人でござりまして、何の役にも立たぬ者、其上、年老いたる尼であるから、世に望みもなし、若い人は、國家の御用に立つ事であるから、有志の連中は、御免じなされ、私は、如何樣なる御咎めになつても宜いと、度々言つたそふです、此の口頭の申立は、其時に詮議した役人より、後に、聞きました、この歌は、則、其意を、其儘、詠出たものと思はれます、元治二年、高杉春風氏が、曾て、野村の別莊に潜伏中、懇待を受け、親しかりしから、望東が流罪となり、老年にて、獨、獄中に苦しんで居ることを氣の毒に思ひ、福岡の人で、長州に脫走して居た、藤茂親を先導となして、船をさし向け、姫島より奪ひ去り、馬關に連れ越しまして、春風氏、其他の諸有志が、深く勞はり、潔室に置きて、婢女を侍せしめて、心を慰さめられ、萬、丁寧の取扱ひをうけて居りましたが、後に、三田尻荒瀨致和氏の家に移り、益、優遇せられ、調度何かの不足もなく、消光する折柄、同三年、毛利親信氏等、其邦君の冤罪を訴へんと、大阪に上らるゝ時、望東は、常に、天滿宮を崇信するを以て、一七日間斷食して、松崎の宮廟に步を運び、毎日、歌一首を獻納して祈願し、一向に、長州の冤罪の解ける樣にと祈りました、老人のことゆゑ、

斷食日參は止めるが宜しからんと諫めた人もあつたさうですが、國家の爲め、且は、長州公、並に諸有志の洪恩に報ゆるとて、聞かなかつたさうです、其頃は、寒い時節、弱質、其の上、牢居艱難に苦しみ、疲勞の末と云ひ、遂に、十月十六日、疫を病みつきましたゆゑ、敬和氏母子、心を盡して藥用せられた、藤茂親、滑川洗、是を聞き、馬關より、晝夜兼行して、三田尻に赴き、看病しました、病中、國主より、殊に、御優待があつて、衣物、菓子を賜はり、且、吏人、看病者をも添られ、三度まで、侍醫に診察せしめられましたから、望東、大名の病人に同じと云つて、忝けなさを謝し、感泣したさうです、其他、役人隊兵など、斷えず見舞ひ、又は、物を贈ること夥しく、此時、揖取子爵夫婦の看護は、一方ならぬ懇切なりし由、醫師三人、晝夜交代して、治療を施された樣子でござりますが、藥石驗しなく、病氣日々に重りけれども、一言も煩苦を云はず、穩に、褥の上に臥し、既に、死を知りて居たものと見え、白布を以て、自分の法服と衣衾とを拵へさせ、沐浴して衣服を改め、もとの褥に歸つて、

花浦のまつの葉志ろく置く志もと
きゆれバわはれ一さかりかな

と讀み置き、眠るが如くに終りしと、（姬島より、馬關に移り、三田尻にて死去迄の事に、始終、望東尼に附添居りし藤茂親、滑川洗、兩人の談話による、）時に、慶應三年丁卯十一月六日、歳六十二でござりました、福岡の藩論、一旦、顛覆して、俗論黨が盛んになりましたが、遂に、天定て雲霧が晴れた後、藩主、望

東が勤王の志篤く、方向卓然たりしに、一時、冤枉に罹りし事を憫み、銀子を下附して、其祭りを修めしめ、又、旌忠祠に祭られました、明治二年七月、年毎に、銀三十枚を其家に與へて、祭祠料とせしめらる、是に於て、望東尼、累年、誠忠の志が、倍、顯れました、二十四年十月二十三日、畏くも。
皇后陛下より、三田尻の墳墓建設費として、御内分金五拾圓下し賜はり、同年十二月十七日、御贈位がありました、以上は、望東尼が畧歴でござります、

却説、望東尼、勤王を唱へました原由、何れの頃よりの事であつたかと云ふ御尋ねに就て、申上げます、此の人の、生立ちます時は、古いことで、私などは存じませぬが、古老の話を承りました處を申上ますが、元子の實父勝幸と申も、格別勝れた事もない尋常の人であつたそふですゆゑ、家に居た時は、通常、家事の加勢などして居た位な事で、幼年の頃、書を讀み字を習ふことも、一般の風習、寺子屋流で、いろはや、女大學位で迚も、綿密な家庭教育など請た事はあるまいと思もはれます、然らバ、如何なる事から起つたと云ふに、往年上京して、
皇居を拜せしに、其時、京都の淋しい摸樣を觀て、座ろに、感慨を起した樣子でござります、湊川楠公の墓に詣て、一層の感を増し、國に歸りて、楠公の社を平尾の山莊に建て、之を祭り、余程、志はあつたと見えます、甫、藩士岡部威明の宅にて、

平野次郎に會ひました時、平野が時勢慷慨の話を聞き、大に感發する所あり、

王室の陵夷を哀み、幕吏の專恣を憤りまして、常に、詠歌言談に發して居ました、平野と懇意になつて、殊に、勤王の志が厚くなつたと、同志先輩の噺でありますから、この頃より、最奮發したものと考へられます、又、望東尼と親しうござりました岡部威明は、通稱、簇、晩年、豫叟と云ひましたが、夙に、平野が非凡なることを知りまして、賤職ながら登庸して、計劃した事もあります、其等に就ても、御話がありますけれども、枝葉に渉りますから、是は他日に讓ります、

第二、如何なる性質の人であつたかと云ふ問ひにつきまして、總じて、婦人であつて相應に學問技藝も有り、世に名を知らるゝ程の者に、十分、婦徳を備へたものは稀であつて、動もすれば、品行が惡いとか、或は、驕妬多言なるとか、大抵、お天婆風の人が多いものでござりますが、望東尼も他から想像すれば、さやうな人ではなかつたかと思ふ人もあるでせうが、大反對であつて、至て容子も閑雅で、坐作進退も穩かにござりまして、高尙優美の婦德を備へ、言語も和らかで、少も、普通の女子に異なつたことはござりませぬ、生涯、人に對して、漢語抔を遣つたことは聞いた者はありません、或る、自分勝手な同權論を唱へ、訛り勝ちなる洋語なぞを、衆人稠坐の前で、故らに囀る一種の女流とは霄壤の違ひでござります、それゆゑ、雅となく、俗となく、皆、親愛尊敬して居

りました、常に、信義を以て人に交はり、慈愛深き人でありましたから、奴婢などは、最、懐きておりました、其證據には、姫嶋に流罪になつた時は、曾て、召使て居た下婢が聞傳へて、附いて行ことは出來ず、遙か跡から附添て渡海し、終夜、牢の外に彷徨し、目を泣き腫らして歸つたと云ふことでありました、是れでも、其慈愛心の深かりしことは分ります、平時は、花鳥風月を娯しみ、頗の風流家でありましたが、其志想に於ては、偉丈夫にも、をさ〳〵劣らぬでござりました、此に申上ますことは、私の過奬でござりませぬ、先年來、薩長、其他、同人に御面接の諸君は、御了知之事と存します、元治乙丑十月廿三日、同志の輩死刑に處せられし事を傳へ聞て、獄中より血汁を以て、心經を寫し、竊に、其家に贈り、靈前に手向けし事は、小傳中にも載せてあります、右は、遺族者に於て、秘藏致して居りますから、是迄、原書を見たことがありませなんだ、然るに、先般、私、歸縣の節、野村家に就て一見しましたから、尚能く調べますに、其血痕心經は七卷で、現に殘つて居るものは四卷あります、一卷は月形家に贈るのでありましたが、其際、嫌疑が在て遣ることが出來ませなんだから、洗藏の朋友、故、加藤直躬の手許まで送りましたのは、于今、同家に在ります、一卷は、森勤作の遺族に遣り、これは、正に、達して保存は致し居るかに承りましたが、森家も、目今、分離して、遠郡ゑ移りまして、見認ることが出來ませなんだ、加藤の家にござりますのと、野村家

の分を見て來ましたが、同人は、假名は善く書き、短冊式紙等には、楷書體の字は、未見たこともありませなんだ、此節、始めて見ましたが、誠に、美事なもので、其血色、稍、黒味を帶び、奥に、

　　後れ居てかくも甲斐なし法の文
　　　　蘇り來んつてならなくに

と自詠が添てあります、字體は、眞行交り、書風は、古法帖智水を學びたものゝ様に見えます、渾厚にして、圭角なく、さながら、婦人の書と認められ、之を觀るに、實に、一字一涙、悚然として、當時を想ひ、悲感凄咽に堪へませず、覺ねず涙をこぼしました、此の原書借用のことを、野村家へ相談致して置ましたから、何れ到着のうへは、後會に携帶して、皆樣の御目に掛けるやうに致しましやう、まだ、美談逸事は澤山でござりますが、今日は、右の血汁心經の御話し丈に止めて置ます、

○寺師君(宗德)、血を注ぎたと云ふは、指でも噛みて、ヽヽヽヽ

○西島、　野村家より聞きますに、筆で書いたものでござります、筆硯は、獄中の嚴禁であるに、如何して筆を差し入るゝことが出來たかと尋ねましたに、素より、許可はなけれど、一族どもゝ、宜しからうと云ふ評議で持ちこみましたといふてとでござります、故助作の老母、現存智鏡院の噺には、自分が、まだ若い時、竪東尼の實母、なくなられた折り、元子、痛く、歎きて、並の物では、心にまかせぬと申して、庭前より、茅の葉を

摘みて來まして、手の小指を切り、血を以て歌を書いて、眞の形見ぢやと云つて、棺の内に納めて、弔はれましたことがあつたが、心經も、その通りで寫したものであらうとのことでありましたが、老血を絞りて經文を寫し、英魂を弔はれた志の靈は眞に、鬼神を泣しむと云ふのは、此のことならうと思ひます(をはり)

●土居すみの貞操　廣島縣豊田郡小谷村の農民に、黒田嘉助と云ふ者あり。同縣賀茂郡重兼村の産にして、小谷村、岡田六兵衛の雇人となり、十二年の間、直實に勤めたるによりて、主家の勸めに預り、黒田要兵衛の養子となりて、其の家を相續し、山林田畠の所有も、年々に增加し、里閭、屈指の大農となりて、養家を興起したり、嘉助は、六十五歳の時に、妻を亡ひたり、嫡男平八、十八歳の頃、賀茂郡杵原村土居銀兵衛の三女すみを娶りしが、性行、父に似ずして、放慢遊蕩なれば、明治十八年の頃までには、家産を破りて、一家離散せんとする不幸に陥りたり。平八は、父親類の意見に從はず、一途に我意を張りて、父をも隣人に托し、妻すみと、四人の子供には、北海道に移住せよと強迫せしが、すみは、更に聞入れずして云へるに、如何に、貧苦に沈まばとて、一旦、親と崇めたる老舅を、他人に托さんは、本意なきことなれば、我身は、如何に苦しむとも、坐右に侍りて、親に仕ふるは、嫁と愛せられたる恩報じならんとて、動く氣色の見えざれば、平八は、俄に、妻を仇視して、時には、刃物を執りて威嚇せしこ

ともありたれど、すみは、恐怖の色なくして、賃雇に服し、僅に、父と子供とを養育せり。平八、一日、家を出でゝ、復歸らず、嘉助すみの苦心は一方ならず、蹤跡を索むるを得ず、負債は殘され、殆ど、極貧に至りたれば、實家の父、今は見兼て、すみに、他家に再嫁せんことを勸誘せるも、すみは、辭するに、殘る五人の子供の生立も案ぜられ、老舅を捨つるは、理に違へる獸行なることを以てしたれば、實父も、其の、志の奪ふべからざるを、不憫に思へど、餘り、すみの頑固なるに困じて、遂に、怒りて義絶したり。すみは、十四歳の長男を力にして、日夜、傭役に服し、殘る四人の子供は、實弟土居利八が世話する所となり、村内には、睦頼母子講を設けて、すみを救濟し、辛うして、一家を維持したり、猶、年若なれど、村内の無賴少年などが、利益を賭けて云ひよる者ありたるも峻拒して　品行を護りければ、里人は、一層其の貞操の篤きに感じたり。明治二十年十二月偶々、夫平八が、江田島に住して、後妻を娶りてあることを聞き、長男を伴ひて、江田島に行き、父に對面せしめ、即坐に歸路に就きしことありしと云ふ。すみが、婚嫁以來、多年の苦境は、この一二件に止まらざるべし。云々（日本弘道叢記）

●知らせ　一月五日發行の分より、

　十六夜日記

の註釋を、つぎ／＼ものせんとす。また、附錄として、いかなるものを添ふるかは、今、こゝにはいはざるべし。

敎の庭

十二月二十日兼題　老少惜年

天　府下小石川區關口町　松原きやう子

飛鳥川ふち瀨つねなき世のなかに
おいもわかきも惜しむ年なみ

地　府下神田區仲猿樂町　臼井直子

ゆく水のまたとかへらぬ年なみを
惜しむはおいの人ばかりかは

人　長野縣長野町　宇野きく子

諸共においもわかきも惜しむなり
ゆきてかへらぬ年のなごりを

野尻鶴子

おいの身も若きもなべて世の人の
惜しむはおなじ年のくれかな

（天地人のほかは原稿到着の順なり）

來ん年のつきひの數はありながら
くるゝ今宵を惜しむもろびと　安井勇子

わかくさも世のとは人も年なみの
早きながれを惜しまぬはなし　安井貞子

行く事のとしといふ名の著けれバ
おいも少きもおしむくれかな　藤野たけ子

ゆくとしを老も少きもおしなべて
惜しむこゝろは變らざるべし　山本澄江

梓ゆみ日かずわらねバとしの瀨の
かへらぬ波を惜しまざらめや　碓井のぶ子

はるちかき年の瀨波をいとをしむ
こゝろは誰もかはらざるらん　碓井たけ子

惜めども甲斐なきものをおし並て
おいもわかきも惜しむ年かな　宮川きよ子

おいたるも少も並て惜しといふは　返らぬ年のくれにぞありける　押尾きく子

飛鳥川ながれてはやきとしなみを　おいも若きも惜しむくれかな　宮坂まん子

おしなへておいも若きも惜しめ共　强いても年のくれて行くらん　吉田たけ子

暮れはてゝ今宵一夜のふるとしを　おいも若きも惜しみこそすれ　小林てい子

よはひのみ殘して年のくれぬるを　老いも若きもをしまぬはなし　山田まつ子

老の身も若きもともに惜しまれて　くれゆく年の名殘をぞおもふ　坂口まん子

おいの身も若きも今宵ゆくとしを　惜しむこゝろは變らざりけり　矢野さく子

一とせもはかなき夢のこゝちして　おいも若きも惜しむくれかな　伊達よし子

みな寄りて流れ隙(ヒマ)なく暮れにけり　老いもわかきもをしむとし波　吉田　芳子

新玉のとしのをはりに成るごとに　おいも若きも惜しむくれかな　横敷たか子

いたづらに過ぎし月日の夢さめて　暮れ行く年を惜しむけふかな　宇多田やう子

年波は行きてかへらぬものなれど　おいも若きも惜しみこそすれ　高野　運子

おいたるも若きも共にをしむなり　行きてかへらぬ水のとしなみ　須知まさを

梓ゆみはるをおそしと待ちながら　おいも若きも惜しむくれかな　永野ひら子

ながれつゝ又と返らぬとしなみの　惜しむは同じおいもわかきも　留守巨樑子

惜しめ共かひや無からん若きにも　おいにも寄するおなじ年なみ　鈴木てつ子

くれゆくを惜しむ我身に比べつゝ　老いし人をぞおもひやらるゝ　志賀　操子

流れゆく波かせはやくとめかへず　おいもわかきも惜しむ年かな　相羽まさ子

ゆく水のながれてまたと返らねど　をいも若きも惜しむとしなみ　波岡しま子

梓ゆみ引けどかへらぬとしなれど　大崎よね子
おいも若きも惜しみこそすれ

たきがはの流れてはやき年なみは　花岡うめ子
老いもわかきも惜しむ也けり

年のはにひま行く駒の過ぎゆきて　藤田すら子
おいも若きも惜しむくれなか

よの中をはかなきものと思へばや　三原とよ子
老いもわかきも惜しむとし波

果敢なくも暮れ行くとしを今更に　横山柳子
わかきも老いも惜まぬはなし

おいの身もわかきも惜しむ年波の　薬師寺芳子
流れはなどかよどまざるらん

老人のとしのをはりの繰りことを　福木いね子
きけどわかきも顧まれぬかな

たきがはの流れて又とかへらねど　中川玄ん子
老いもわかきも惜しむとし浪

身につもる老はいそがしうなゐ子と　土屋てい子
ゆき見ておしむ年のくれかな

くれて行く年を惜しむは老が身も　伊達富貴子
若きもおなじこゝろなりけり

老いぬるも少（ワカキ）もいとゞ身にしみて　水谷きよ子
すぎ行く年のをしくもある哉

くれて行く年の別れは老いたるも　大枝ひで子
若きもともに惜しまるゝかな

變らじなおいも若きも今日のみと
くれゆく年を惜しむこゝろは

うれしとはさるものながら親の爲　師岡千代子
暮れ行く年を惜しむ今日かな

初春のこゝろのちかひいたづらに　大槻かをる
なるを悔ゆるは老ばかりかは

とし波のよるてふことを思ひつゝ　小原さと子
若き身にさへ惜しむくれかな

年もはや急ぐとなしに暮れ行くを　笠原よし子
おいも若きも惜しみこそすれ

いたづらに夢の浮世をすぐしてぞ　淵井とみ子
若きも惜しむとしのくれかな

明日〳〵と思ひて暮れし年なみは　熊谷あや子
わかきもいとゞ惜しまるゝ哉

おしなべておいも若きも行く年を　尾崎なほ子
惜しむこゝろや替らざるらん

押しなべておいも若きも惜しむ哉　柳　清子
またもめぐりこぬ年とおもへば

十二月二十日兼題　松不改色

天　府下芝區三田四國町　師岡千代子

野山におひ立てる樹の千萬とかぞへあへぬまで多かる中に春の櫻花秋の紅葉をめでたく麗しき物のかぎりにいへりされどその朝日に匂ふ櫻花も夕日にこがるゝ紅葉の色香のいひしらぬも一夜のあらし吹きすさべば雪とちり雨と亂れてかへり見る人もあらずなり行くは常のことになむさるを櫻の如く麗しき花もなく紅葉の如く千しほの色もなくいつを盛いつを時とはなけれど風ふけどもちらず雨ふれどもあせず霜にたへ雪をしのぎて高き梢に千年かはらぬ操をあらはすものは松にそありけるされも此にたとへてはかぎりなき君が代をことほき人のよはひの千とせへむためしにいひなしなど雪とちる櫻花雨とふる紅葉のひとしなみに云ふべきにはあらざりけり殊にをみなは此常しへに色かへぬ操に習ふべかりけり霜雪に堪へしのびてあるべかりけりと常におもふてこゝろをかくなむ

地　府下本郷區龍岡町　横山柳子

折ふしにつけてをかしう見所ある此木やいつもかはらぬみどりなれど春はひとしほのいろそひてみゆるもおもしろく夏は其下かげの夕すゞみまたきに秋の心地して枝ふく風もなみの音かとあやまたれぬるぞいみじき秋はまた三五の月藥でしの影いとうさやかにえもいはれずをかしもみぢせし木の葉もちりて庭もやう〳〵冬がれて前さいの木ともみなうつろひつゝ其いろとしもなきにまつのみは猶千とせのいろ深くなべての木とひとしなみにやはあるきのふまでは野山に心うつしゝかむさまで思はざりしも霜深き此頃こそつひにもみちぬとひしもげにさることになん其操は人のうへにもま

もりたきことなりかし女は花としわかゝうかたちにはひやかなるほどは人もめづらん夏すぎ秋くれて冬がれとなりたらむのちはたゞこの操をたのむのみされバたかき操の松にちぎりて千とせかはらぬこの徳をこそえめと思ひつゞけてかくなん

人

京都府愛宕郡
上賀茂村　山本澄江

野分立ちしより露おき霜ふり今は風あれて雪さへちりけれバ秋の色染めし秋女郎花はいづちいにけむ影だにとゞめず朝日に匂ひし櫻木も時雨に染めし紅葉もいつしか枯木とはなりにけりかゝるさびしき庭の面に松の色かへぬこそいとめでたけれ人も時にあひて榮ゆるは易けれどたへがたき折に操かへぬぞかたきわざなる然れバ女の鑑はげにこの松にこそと思ふまに〱かきしるしつ

藤野たけ子

春は花秋は紅葉と人の心もちゞにうかるれど花紅葉もちりての後はくやしかるべしさるをひとり松の操たゞしく四時に色かへぬこそまたなくめでたけれ今ひとしほど昔の人のいひけんもげにさる事ながら遂にもみぢぬ色の雪ふかき冬になりてあらはるゝぞいみじきされどこそ古より松は千年ふるものとて萬めでたきものゝためしにもひきあるは操たゞしき人の上にもたゝへつべしましてをは操たゞしき人の上にもたゝへつべしまして女は花紅葉のうるはしきをのみめつるものかは松のみどりのとことはに色かへぬ操たもてるぞいともいともめでたき限りになん

宮川きよ子

若葉しげりあひて月さへもらぬ夏山も秋のなかばを過ぎぬれバいつしかいろおとろへてみる目もなき様になりにたるそが中に定めなき時雨にも嵐にもさそはれず己が操のいや高く青々として聳えたる松こそめでたき限りなりけれされバ世の人の松の操ともてはやし女子の貞烈なる心ばへをも松によそへて皆びまたよはひ高き人々を松になぞらへて壽くなどなべて世の人にたふとまるゝさまめでたしともめでたし

ふるゆきに操みがきて五百枝さす
　松に八千代のいろは見えけり

吉田　芳子

あはれ故人の松の操をめでしこそうべなりけれ きのふけふ空かきくれてふり積る雪の絶間なく離は埋れはてゝ山となり霜枯の梢は春に先ちて花咲きそめ池のつらのひやくしん岩のはさまのろてつなどふつゝかに硃ましかりしけはひの程もさまことにかはりて見わたさるゝを常盤の松の獨その操きよく千歳の色をあらはして白雪に埋れぬこそいみしう見所ありてたふとけれあはれ世の姫君達よこの緑深き松の操は霜にたへ雪をまのぎてのちにあらはるゝものなることは知り給ふらむ人の操もまたかくぞありけむ

松原きやう子

世の中にあらゆる草木はよきもあしきもさま〲なれど千とせふる松の操ぞかりめで度ものはあらじさるはをりふしにうつろはず雪霜にも枯れで緑をたもちたるさまこそいと貴けれ人のめではやす

春のさくらはさら也夏の卯花秋の紅葉さては冬の菊などいろ〳〵とり〲なれどこは一ときのながめにて僅かに一日だにたもたで冬がれの木がらしにあひぬればやがてなくしをれて影だにとゞめずあはれにすさまじき骨のみをぞのこすめるさるを松のみは常盤のみどりをそへつゝおげりゆくさまいと〳〵めでたしやいがでこの世に生れ出でたらん人にして松におとらざらめやわきて女は松の常盤の操正しく守りていかなる事の起りたる時にのぞみてもその節をあらはさまほしうなむ

宇多田楊子

身も凍るばかりのいと寒き冬の日に霜害はいたく置くともけだかくして其の色を改めず終始操を全ふするものは松にぞありける嗚呼誰か見て感賞せざる者やはあることに女子たる者は貞烈の心を本とすべき者なればこを庭に植へ置て朝な夕なに愛で眺めては變に處し難に臨み昕る行のあらん心を養ふやうにすべしげに松こそは草木の中の王として婦女子たる者のかゞみとなすべき者にはありけれ

唐澤しげを

寒さにかまけて宵の程より打ふしければ秋の夜のながながしきにわきはてゝ暁ばかり目をさましいざ昨日の紅葉めでんとて雨戸押わけつゝながむるに萬の上におく霜を雪ともあざむきいと白く身をきるばかりの寒さ肌にしみ渡りていたう強ければいとのこりをしく思ひつゝ内に立ち入りて文机に打向ひしがしばし程へて又もや眺むればさしくる朝日に霜消えてのこれる木の葉は色黒々とくちはてゝ見るかひもなし此時一きは高く見えけるは千代の色香を葉にしめて緑かはらぬ松にぞありける

もみぢ葉の花をあざむく色消えて
緑いやます松ぞめでたき

さてもくうき事しげき世にありて行ひすます人こそは千代をへて斯くまでたかく變らぬ色香の松の操に打ならびいとくしく慕はしき限なりしが

庭の菊の盛りに人を招く文

平井てる子

秋のけしきの何れともなく物さびしき折からに暫時庭前を見わたし侍れば去年より手つから培ひやしなひつる菊の徒然をなぐさめがほに花咲そろひ侍りぬあまりの見事さに一人たのしまんもをしき事かなと思ひ侍りしに幸明日は日ようにて休暇なり御さはりさへおはさねばいで菊見がてらわたらせ給はらむ程まち奉らむをあなかしこ

一月兼題

- 五日
  - 歌……寄山祝
  - 文……新年
- 廿日
  - 歌……社頭雪
  - 文……よろこばしきもの

餘芳

みちのつと（つゞき）

小池道子

本堂など、誠に、いかめしかりしを、往にし年、燒け果てたりとぞ。晝のおもの奉りて、此の奥に在る、月輪關白の御墓に詣でさせ給へり。兩本願寺の法主、案内仕う奉り給ふ。こゝより。盲啞院に渡らせ給ふ。物いはれぬ兒らに、物敎ふる心盡くし、いかならむ。能く見取りて、苦しげながら、いひ續くるを聞くも、胸痛し。盲人も、算術を始め、讀書、外にも、習ふ限りの事ども、御覽せさす。かゝる子をしも、持ちたらむ親の心、思ひ遣られて、いと悲し。さはれ、世に廢れ人と成る可きを、かく、人並々の業敎ふる道を、履み開き給へる御世に逢へるは、暗夜に、燈火得たる心ちすべし。宮は、殊に、御心留めさせ給ひ、かうやうの事は、いかにして敎ふるぞなど、細やかに尋ねさせ給へるを、敎師も、いかに、忝く思ふらむかし。内に歸らせ給ひて、御湯仕う奉りなどす。威仁親王、御息所と共に、參り給へり。往にし日、外國より歸らせ給ひしに、此の京に坐します程なればとて、昇り給へる

なりけり。椅子給はりて、こまやかに、御物語有り。御二所とも、漸々に、ねびさせ給ひて、幼き宮の物し給へるも、にげなからぬやうに成り給へりと、打ち守り奉らる。前田從三位、北の方も、又、隨ひ奉りて、歸りし人々、さるべき限りは、皆、賜を給はりぬ。

九日、晴。踏水式に臨ませ給はむと、午前十時に、御門を出でさせ給ひて、行幸有り。十二時より、宮は、出でさせ給へり。暫くの暇給はりて、修學院に參る。例の田舍みち、心安く面白し。先、下の離宮に入りて、案內求むるに、殿守、悅び出で迎へて、戶あけなどす。今日は、あわたゝしう出で立ちたれど、大方のみ案內してよといひて、御茶屋の有りさまのみ、外より拜す。御庭は、廣からねど、木立物舊りて、面白く造りたる中に、花の、盛りに咲き匂ひたる、いとをかし。鰐口の燈籠といへるあり。これなむ。名高き物にて侍るなどいふ。木戶を出づれど、畑なり。畔道を經て、上の離宮に昇る。こゝの殿守も、悅びて案內す。こゝに、行幸は坐しまさずや、行啓は、いつの頃にかなど、心一つに定めていふも、理なり。先つ年ハ、女官たち、屢、遊び給ひしを、こたびは、などか、見え給はぬなどいふ。隣雲亭の

板敷にて、休らひながら見渡すに、打ち霞みたる遠山も、野邊の撫菁、麥生も、只、御苑の物なりけり。あなたに見ゆるが嵐山、こなたが愛宕、衣笠なり。少し隔てゝ、低く見ゆるが舟岡なりなど、例の案内人いふ。傍へに、利休形の燈籠など有りて、雅びに物さびたる御苑の景色、短き筆に書かむは、中々なりや。同じくは、内に入りて、殿の造りざま、殘り無くなど、忠やかにいへど、心のせかるれど、御苑のみ巡りぬ。比叡の山より落來る瀧の音、涼しう、谷川のやうに、岩ほの欹てるに觸れて流るゝ景色、奥山に入りたる心ちす。窮邃軒を過ぎて、石橋を渡る。誠に、いかめしき石なり。光格天皇の御代に、水野越前守の、奉られしなりとぞ。池の邊りは、珍らしき木立多かるに、打ち交りたる櫻の、はら〳〵と散り來るさま、友無くて、見るは、いと、かひ無し。赤山の御社も、近く見えて、景色を添へたり。本の道に出でたるに、いかに急ぐとも、中の離宮を知らぬは、口惜しかるべしといはれて、又、畔道を、走るやうに歩み行く。こゝにも、殿守、出で立ちて案内す。此の殿は、東福門院のおましを移させ給へるにて、麗はしき造り樣なり。御杉戸の畫の鯉の由緣など、細やかに語れど、例の、うちにはいらず。御そのには、杜若などあ

り。夏のけしき、ことにやわらん。みついちの上に見ゆるは、林丘寺の宮のみあとなりとぞ。今すこしめぐりてよとすゝむれど、いそぎて、もとのみちよりかへる。山はなゝる、何がしの家に入りて、またしやすらふ。車引人に、ものたうべさせんとてなり。たか野川のながれ清くして、しがらみにかゝれる波のけしき、えもいはずおもしろし。かうやうのところに、老いての後のいほり、むすばまほしうおぼゆ。かり橋をわたりて、松かさきの方より、かものみ社にまうづ。みたらし川の水、くみあげて手洗ふに、心もすがすがしうなりぬ。馬場のかたへの、さくらのもとに、むしろ打しきてあそぶ人々多かり。

かも山の花のさかりのにぎはひを神もうれしとみそなはすらん。」見まほしき所多かれど、れいの、車はしらせて、下鴨にもうづ。まつりのまうけにかわらん。宮人、まくなど、とうでゝ、はしあへり。はるかに拜み奉りていづ。たゞすがはの水底清くして、たちさりがたけれど、時計をみれば、二時過ぎたるにおどろきて、いそぎかへりぬ。

十日、晴。九時三十分、御かどを出でませ給ひて、博覧會に行啓あり。赤十字社員

に謁をたまふ。仰ごとは、小松宮、つたへたまへり。つらねしものども、ねもごろに御覽じて、かへらせたまふ。午時過ぎてより、御學問所の御庭にて、飛鳥井雅望卿などの蹴鞠、御覽せさす。さうぞくよりはじめて、立ゐ、ふるまひ、すべて、むかしにかへるこゝちして、なつかしう見ゆ。宮の御方には、内大臣の北方、にし、ひがしの本願寺の北方、參り給へり。わたくしさまには、大坂ますめる、いもうと國子こども、ゐて、とぶらひたり。をさなごども、人にいざなはれて、いづくまでかまゐりけん。物たまはりぬと、いたゞきもちてかへりきたり。ためしすくなき、よのめいぼく。あまりにかたじけなくて、むね打ちさはぎぬ。まして、おやの心、いかなりけん。ぬかづきたるまゝにして、まかでしは、物もいはれず。

十一日、午前晴。いとまたまはりて、午前十時に、内を出で、近江にと心ざす。北島權掌侍、吉田權命婦、女嬬三人、その外、またがへる女どもゝ、あまた出でたれバ、車、多く引きつゞきたり。出でんとする時、愛子の君より、

言のはの花まつりけふはもろともにゆかぬうらみもおもはざりけり」と有りけるに、

いかなれどおなじたびぢにいでし身のおなじところにゆかれざるらん」一宮の[illegible]矢野氏、近江人なれど、けふぞ、こまやかに、あないし侍らんといひて、先にたちつゝゆく。處々に、車とゞめて、こゝは、なにがしのやしろにて侍り。こゝぞ、なに寺なるなどいふ。田舍人の、はじめて、都にいでたらんやうに、物とふさま、よそに見る人、いかにをかしからん。山しなにて、天智天皇の御陵を、はるかにをがみ奉る。はしりゐを過ぎて、あふ坂山にかゝる。蟬丸社有り。また、關明神蟬丸社と書きたる碑あり。山のうへは、よく見えねど、關の杉村など、歌によめるは、此のわたりにやあらん。大津の驛にて、しばしやすらひて、石山寺をさして行くに、あはづのはらを、右にみる。例の、麥と、すゞなのはらなり。義仲朝臣の塚、兼平のはかなど、をしふれど、はるかにて、さだかならず。とかくするほどに、石山にいたりつきぬ。いははのすがた、聞きしにまさりてめづらし。本堂にまうでゝ、觀世音ぼさちをふしをがむ。げに、千とせへにけんあと見えて、物ふりたる、いとたふとし。源氏の間にいりてみる。たなに、寶物どもあり。いたうくらけれど、むかしは、こゝより、みづうみも見えし也といふ。むかひの、ろうのやうなるところに、

紫式部の書像の軸かけて、自筆の大般若經の卷物、手ならしつる硯石など有り。げに、佛に、ちかひをかけ奉りて、ながき物がたりも、かきおほせけんと、いとたふとし。物がたりはさておき、人がらの、めでたかりしことゞも忍ばれて、ふしをがむ。こゝをいでゝ、すこしのぼれば、大日如來をいつきまつれる堂有り。こは、頼朝公の、いつきたまひしなりとなん。頼朝公の塚、乳人のつかなどあり。月見臺にのぼる。これは、いたく、年おくれて、たてしなるべし。見わたすあたりは、湖水も、やゝはてにて、しゞみとる舟など、いささか出でたるのみ。かへりみちに、つりがね堂あり。五十あまりならんと思ふをうな、ゐて、此のかね、龍宮より、寄附のなり。つきたまへ〳〵とせむれど、こゝろみに、つきてみるに、たやすくなりたり。みなひと、わらひながらに、手々につく。あまたのひとなれば、しばしは、なりもやまざりけり。いざ、この人々をぞ、かならず、極樂にいざなひてよといへば、をうなもわらふ。きざはしをおりてゆけば、あか井あり。岩のひまより落ちくるさま、げに、靈水とみえたり。本堂の、觀世音ぼさちの下より、かよふといふ。雛も、みぎりみな寺なり。みちには、さくら、まぢらにつゞきたる、見所あり。

（つゞく）

副島伯爵校閲
東久世伯爵著
松本楓湖畫

尋常小學修身書　全四冊　每冊七錢八厘

全　教師用　全四冊　上製各冊十二錢

高等小學修身書　全四冊　每冊九錢七厘

全　教師用　全四冊　上製各冊廿五錢

中學國史　全六冊　[redacted]

高等小學國史　全三冊　每冊十九錢

尋常小學國史談　全二冊　全十錢

國光社

女鑑第五十二號目次

女鑑
賢業の風尚

論說
女子學問の精神　大林弘一郎
女子要書第二編(二十四)　三輪田眞佐子

史談
題目　馬醉木滋野
石川伊八の姿いし女　古里なの子

家政
育兒小言(三十八)　武谷水城
家政雜事(七)

漫錄
沖繩縣旅行日記　隨々庵主●三痴三說　松野操雄●道のまなり歌あはせ　久志本常幸●老の心　松竹居主人●門田のさなへ●妾に送りしふみ
女諸師(其四)　乙羽庵主人

文林
歌
近衞忠熙●東久世通禧●鍋島直大●前田利嗣●高崎正風●前田利鬯●諏訪忠元●宮地嚴夫●小出粲●坂正臣●植松有經●內藤存守●三浦千春●草野隆道●千日亮●鍋島榮子●蜂須賀隨子●前田朗子●柳原愛子●小池道子●松平健子●鳥尾廣子●田邊龍子●中島歌子●諏訪晴子●尾崎すう子●師岡須賀子●渡上壽子●片岡光子●河野文子●千稻子
文
鵠沼紀行　小泉てる子●夢のなごり　竹園

雜報
●皇子御降誕●歌御會始御題●孝貞の婦人●野村望東尼の話

敎の庭
歌文數十首

餘芳
みちのつと(つゞき)　小池道子
●口繪　高橋松亭　●挿繪　小峯邦壽

女鑑

每月貳回五日廿日發行

定價壹册金十錢
三ヶ月前金五十五錢
半ヶ年前金壹圓
但全國無遞送料
廣告料五號字廿三字詰一行金二十錢

明治廿六年十二月十九日印刷
同　年同月　二十日發行

東京京橋區築地二丁目二十一番地
發行兼印刷人　川崎直衛
同　編輯人　山根勇藏
同　發行所　國光社

(印刷所　東京國光社印刷部)

(明治二十四年八月八日內務省許可)
(明治廿五年三月十二日遞信省認可)